

朝鮮西伯利紀行自序

日ヤ月ヤ人ヲ待タズ歳又玆ニ暮ントス回顧スレバ余ガ韓山魯水ノ間ヲ徜徉セシハ炎暑鑠金ノ候ニテアリキ而シテ今也北風凜烈トシテ雪ヲ送り歳華盡クルニ垂ントス想フニ曾テ韓馬汗ヲ絞リテ馳セタル蔚山ノ途上ハ正ニ皚々ノ積雪ヲ以テ蔽ハル、ナルベシ驕陽ノ爲メ顔面爛ル、ノ思ヒヲナセシ浦塩ノ埠頭ハ方ニ稜々ノ堅氷ヲ以テ鎖サル、ナラン然リ自然界ノ約束ハ常ニ斯クノ如クナルベキ也彼レハ嘗テ其約ヲ違ヘズ而シテ人ノ其約ニ背クモノ多シ余ガ漫遊ノ程ヲ了リテ歸着セシヨリ既ニ五閱月今漸ク其紀行ヲ世ニ公ニスルニ至レリ時維レ窮陰ニ臨ミ將タ曷ゾ言ハン唯感懷一首ヲ記シテ明治ノ第二十六年ヲ送り併セテ序ニ換フ

半生陳迹附悠々
汗馬直馳蔚山路
異邦風物猶餘夢
時節無端年欲暮

更上長程萬里舟
鐵車又渡陽水頭
鄉土雪華忽撲裘
獨擎寒燭數曾遊

明治二十六年除夜東京日本橋始終堂ニ於テ

著者識

朝鮮西伯利紀行目次

魯韓國際間の現象

余が今回の遊意

九州鐵道途上の囑目

九鐵の繁昌

博多祇園祭の賑ひ

博多を出發す

香椎の宮及び其靈樹

征韓及び熊襲の遺跡

門司馬關の兩港

日本を發す及朝鮮近海の景

釜山に上陸す

内地旅行に就き領事の談話

釜山の氣候及地質

釜山居留地の光景

一	二	三	四	四	五	六	七	七	八	九	十	十	十
頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁

朝鮮人の風俗及習慣一斑	十二頁
朝鮮人の生活一斑	十四頁
居留地雑事	十四頁
朝鮮婦人の容貌并に衣裝	十五頁
朝鮮固有の臭氣始めて鼻を撲つ	十六頁
韓屋の構造	十七頁
韓人の室内耕作及其村落	十八頁
龍頭及龍尾山	二十頁
釜山に於ける日本小學校	二十頁
國家に對する朝鮮人の思想	二十二頁
釜山測候所	二十三頁
釜山の海水浴	二十四頁
加藤清正の虎狩山	二十四頁
釜港監理署より與へたる護照	二十五頁
蔚山へ旅行の程に上る	二十六頁

余等の携帶品	二十六頁
草梁の村に於ける金の住家	二十七頁
醫師及賣店	二十九頁
東萊府に於て官家を訪ふ	三十一頁
金山温井	三十二頁
韓人の食物	三十三頁
金山を曉發す	三十四頁
機張途上の所見	三十四頁
半日太古有巢の民を學ぶ	三十六頁
蔚山路の嶮及其地質	三十七頁
蔚山城趾に登る	三十八頁
蔚山酒幕に於ける土人の見物	四十頁
西城椽門に宿す	四十一頁
府城中螺聲起る	四十二頁
蔚山市場の光景	四十三頁

酒の製法を見て嘔氣胸を衝く	四十四頁
韓人の不潔驚くに堪へたり	四十五頁
蔚山の歸途	四十五頁
朝鮮の馬騎者を水中に投ず	四十六頁
暗夜虎魄の嶮を辿る	四十七頁
朝鮮の旌表碑	四十八頁
朝鮮の學校を觀る	四十九頁
再び一人の好伴侶を得たり	四十九頁
余等の一行に關する東亞貿易新聞の記事	四十九頁
滯釜中の來訪者	五十頁
領事の裂應	五十頁
朝鮮國衰退の原因	五十一頁
釜山居留地の由來	五十二頁
東京丸に乗組む	五十二頁
余等の同船者	五十三頁

江原道沿海の形勢	五十三頁
關東八景	五十四頁
海上の平穩	五十四頁
元山津に入港す	五十四頁
今は元山津の梅雨期なり	五十五頁
元山領事館を訪ふ	五十五頁
元山津の貿易	五十六頁
元山居留民の教育	五十六頁
元山の位置及氣候	五十六頁
元山津居留地の風致	五十七頁
白頭山は火山なり	五十八頁
歴史上に於ける咸鏡道	五十八頁
漁船發航の延期	五十九頁
秋冷遶に來る	五十九頁
朝鮮貿易に對する紳商の談話	五十九頁

元山街頭の所見	六十頁
元山津を出發す	六十一頁
鐵嶺の曉望	六十一頁
元良哈を望み藤肥州の古事を懷ふ	六十二頁
鹿島何時の間にか魯領と化す	六十三頁
魯國南下の策歴々見るべし	六十三頁
圖南策に對する朝鮮の措置	六十四頁
魯西亞水兵の舞踏	六十四頁
金角港頭兵備嚴なり	六十五頁
蟹氣樓の一大市街	六十六頁
硝烟浦鹽港を掩ふ	六十七頁
浦鹽に於ける種々の風躰	五十八頁
鐵子及其市場	六十八頁
西伯利大鐵道線路を踏む	六十九頁
烏港は總て建築時代なり	七十頁

日本旅店の繁昌	七十一頁
浦鹽管理の來歴	七十一頁
浦鹽港の進歩	七十二頁
浦鹽港の氣候	七十四頁
氣候の不順	七十四頁
冬期の氣候及其烈寒	七十五頁
風力には定時あり	七十五頁
浦鹽氣候の兩極端	七十五頁
武斷政治の餘波役伐殘忍風をなす	七十六頁
美術優雅の風に乏ま	七十七頁
浦鹽の名物達磨と赤鬼	七十八頁
鹽子の境涯	七十八頁
商業の景況并に輸出入	七十九頁
皇太子歡迎門	八十頁
市中の重なる建築物	八十一頁

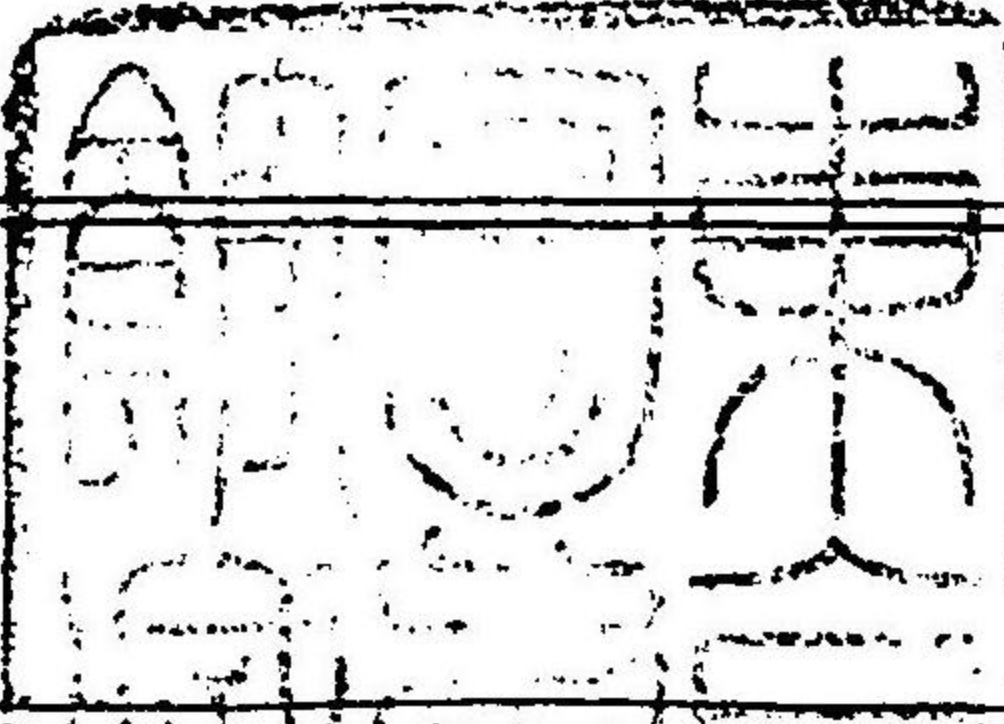
艦隊及び其兵備	八十一頁
浦鹽を貿易港とするの準備	八十二頁
地質及家畜	八十二頁
憐むべし支那人朝鮮人	八十三頁
夜間浦鹽の物驢巡査の脅迫	八十四頁
浦鹽港の犬	八十四頁
内地旅行の程に上る	八十五頁
旅行用の馬車	八十五頁
魯國民の生活	八十六頁
内地の物驢馬車の暴狀	八十六頁
内地の平原及其動物	八十七頁
滿州隊商の露宿を見る	八十八頁
内地劫賊の害多し	八十九頁
大平原中の一孤店	九十頁
内地の響應	九十一頁

囚徒の村落	九十二頁
内地の地質一斑	九十二頁
植物界	九十三頁
蜚虫の發生	九十四頁
屯田兵村落の觀望	九十四頁
工兵作業場の障害物	九十五頁
麥酒釀造會社後園の小酌	九十五頁
蠻子芝居を観る	九十六頁
演劇の仕打	九十六頁
劇場内の光景巡査の醜態	九十八頁
浦鹽物價一斑	九十九頁
事務館嚙席に於ける談話	九十九頁
浦鹽を出發す	百一頁
醜業婦	百一頁
浦鹽の名殘	百二頁

船中加藤師の快談	百二頁
日本海中奇遇に驚く	百三頁
元山津に入港す	百四頁
領事館の談話及氣候	百五頁
加藤師の演説會及小森氏の出發	百六頁
元山の村に遊ぶ	百七頁
韓の娼家を視る	百八頁
韓婦の汲水	百八頁
元山津の告別	百九頁
航海中の珍聞	百十頁
佛人美好氏と語る	百十二頁
日本海中の水族	百十三頁
火山岩の配布及地震	百十三頁
再び釜山に上陸す	百十四頁
高麗水道を過ぐ	百十五頁

渡航者須知

對州の觀望及其近海	百十五頁
長崎に入る感懐	百十六頁
郵便料	百十七頁
電信料	百十七頁
航程	百十八頁
船便	百十八頁
乗客運賃表	百十九頁
旅籠店及宿泊料	百二十一頁
内地旅行の用意品	百二十二頁
魯韓より採集品	百二十三頁
朝鮮世界圖の解	百二十九頁



魯韓國際間の現象

朝鮮西伯利紀行

魯韓國際間の現象



矢津昌永著

若し優勝劣敗をして到底免るべからざるの理數なりとせば、世界の最大國而も世界の強國と・世界の小國而も世界の貧弱國と・境域相密邇するの現象は如何の奇なる現象は是れ國際間に於ける優勝劣敗の最も顯著なる好標本にあらずや・此の好個の標本今近く日本海を隔つるの彼岸にあり人若し之を實見せんと欲せば請ふ去りて圖們江畔の魯韓境を接するの所に於て之を徵せよ余曾て政治地理により之を叙して曰く

天山及泰山の北平原茫渺として遙に北洋の氷床と相連るものは即ち西伯利平原とすスラヴニック種一たひ東歐に呼號して魯國の勃興するに方りてや此の曠野亦彼が侵略を免れず忽ち故索兵鐵蹄の下に蹂躪せられ烏拉山系の境界線を踰へて北太平洋の彼岸にまで達したり而して其次第に圖南の途を拓くに當りてやヤプロノイ山系の天壁を踰へ間もなく黒龍江水を渡り來りて雙頭の鷲旗は鷄林國境に翻るに至れり乃ち直に絶東の浦鹽斯

徳を擡で軍港とし、將に鐵路六千里を大成し、以て首府と呼吸相應せんとす、顧みて其嚙下の小半島國を見れば、爾們江の一衣帶、匪に天然の限線たるに過ぎず、少しく勇を鼓せば、飛渡するに難からず、而して、瀟城宮裏は、頑夢未だ覺めず、外戚權重く、群小事を用ゆ、加ふるに財政の究迫は、已に其極に達し、禍機實に一髮のみ、異日浦鹽斯徳に艦隊を浮べ、威を東洋に振うに當りて、日本の囊口を封鎖して、之を牽制すべきは、實に我が對馬警備區と、朝鮮南角となり、若し此半島をして、猛鷲の一攫するに任せば、東洋の大勢は、何を以て之を回さんや、云々痴鷄餌食を貪りて、猛鷲の狙うを知らざるの有様ハ、實に斯の如きの現象なり

余が今回の遊意

余素と外遊の志あり、然れども、先づ此等、東洋各國に遊び、其實況を目撃し、而して漸次西部に及ぼさんとは、又是れ宿志なりき、明治二十六年、偶々夏期休暇を得たり、是に於て、先づ朝鮮に渡り、其人情風物を探り、次で魯領浦鹽斯徳に航して、西伯利に遊ぶ事に決し、旅裝匆匆、單身飄然として、茲に外遊第一着の途に、上るに至れり

余が今回の遊意

九州鐵道途上の囑目

九州鐵道途上の囑目

七月二十四日、五時四十分、熊本發一番瀛車にて出發す、車中幸に、知友渡邊氏あり、車中の無聊に相手を得て、種々談笑す、旭日朝霞の間に出て、草露珠をなし、一面の水田、插秧新に了り、菁苗滿目、蒼々として、井が秋實の豊穰を豫報し、頗る壯觀なり、植木驛を過ぐれば、昨夕、熊本四近を潤したる白雨は、此驛以北は、其痕跡もなく、稻田處々龜裂するを見る、田原坂、七本村は、昔に名高き激戰場、早や十七年の一夢と過ぎ、當日彈丸の爲に、寸青の眼を遮るなかりし、阪頭も、今は翠綠再び合して、空く紀念碑を擁するのみ、木葉驛は、戦死者を祭るの靈塋、忠墳義塚の、累累として、櫻間に列するを見る、嗚呼忠魂は、櫻花と共に永く芳しからん、高瀬驛を過ぐれば、此驛以北は、再び昨夕の、白雨一過せしものと見へて、道路も濕ひ、河蒲根の花黄なる間には、蛙の時を得顔に、其の喉を鼓して、調子高く歌うあり、筑後に入りて、矢部川驛の西方、十二三町の所、炭酸泉の温泉場あり、聞く近來、其繁昌を計らんが爲め、湯亭等規約を設け、諸事廉價に勉強し、専ら浴客の便利を旨とすと云う、閑人の一浴を試みる所ならんか

九鐵の繁昌

九鐵の繁昌

以上各驛を過ぐる毎に、各等の車中共、乗客は層一層と増加し、大牟田驛を過ぐる頃よりは、室内は早や餘地なく、客車は人の荷物を盛れるが如し、蓋し、昨日來、乗車賃半減の影響なり、事に托して車賃を半減する毎に、九鐵會社の上り高は、平日に數倍すと、是れ所謂數にて「コナス」と謂へる商機の秘法ならん。鳥栖驛は、佐賀行、門司行の支線にして渡邊氏は、佐賀に用事あればとて別を告げて車を下れり。余は是より、無言を守りて、菅公の遺跡なる、天拜山を左に、寶滿山を右に、望み、和換らず、筑紫瀨の、沖積層平原の淵を、北へと馳せ、十時十八分、博多驛に着す、此行、海外旅行券を、福岡縣廳に於て、受くる用事あれば、此驛に下車し、直に腕車を飛ばして、中島町、古賀文回酒店に就て、釜山行瀨船の、門司出港時間を問へば、明日午後四時、白川丸出港すと云う、是に於て、福岡縣廳に出頭し、旅券下附の手續を済し、本日は古賀文に、一泊することに決す。

博多祇園祭の賑ひ

博多祇園祭の賑ひ

當時博多は有名なる祇園祭に際し、炎威鑠金の節にも拘らず、村郎野娃の續

々として練り込むと、實に夥しく、瀨車の博多に着する毎に、左しも溢れん計りに、充滿する乗客の、十の七八は、爰に下車し、肩摩殺撃の賑ひなり、市内の町々には、名高き彼の「山笠」と稱する、盛に裝飾したる屋台を疊々と、屋よりも遙に高く積み上げ、亭々として、遠きよりも望むを得べし、而して、午時に至れば、町内の男郎は、勢を揃へて練り出し、山笠を祇園社前に奉り、午後五時に至りて、再び引き返る、其の熱鬧喧騰なるを、名狀すべからず、山笠の高さ、凡う八間、其製各々異なりと雖も、大體の形は一なり、即ち、宮殿樓閣を積み上げ、五六層、若しくは七八層となし、其内に、當地特産の、博多人形の、龍神又は、著名の人物を置き、之れに、海神、捧釣、響若しくは、聖后、招神、琴、又は、單騎、遠征、響、等と標し、相當の寓意ある者を設けたり、而して、町内の若者、凡う五六十名、各々揃の半纏を着し、冷水を被りつゝ、一様の掛け聲にて、練り廻り、其狀恰も狂するに似たり、夜に入り、祇園社に詣れば、各町の山笠に、數十の燈火を點し、甚だ美觀なり、今年の山笠は、總て六本、一山四、百圓以上を費せりと云ふ。

博多を出發す

博多を出發す

七月二十五日、博多驛一番瀨車(七分)に搭し、出發す、釜山行瀨船出帆は、本日午

後四時にして、未だ時間あれば、香椎宮に参拜するが爲め、香椎驛に下車し、一茶店に、休息の上、参拜す

香椎の宮及び其靈樹

社は驛の東五町の所にあり、祭神は神功皇后にして、社格官幣大社とす、建立は神龜年間にして、皇后征韓の時、鎧袖ふ挿まれし杉を植へられ、又劍鋒杖の三重器を埋められ、以て長く異國降伏の鎮となすべしと、宣ひしを、祭りたる所なりと、其神杉は、老幹盤桓して、現に社内に存せり、此杉は、他の杉とは異にして、海松房の如く、交葉綾の紋の如しとて、綾杉と名けたり、斯る靈樹なるを以て、往昔は、此葉を、毎歲朝廷に奉るの例ありしと、又古來、太宰帥となりて、筑紫に下向する人は、必ず先づ香椎宮に、参詣すべき定めあり、其時、神官より、此葉を冠に頂かしむる故實ありしと、又豊太閤征韓の時、綾杉の葉に、守札を添獻せしかば、異國征伐の首途にとて、發向の諸將に頒與せりと云う、左しも、威靈の杉なれば、余も、渡韓の首途にとて、神官に請うて、其一枝を帽間に挿めり、此杉に就き、左の古歌あり

千早振る香椎の宮の杉の葉を

ふたゝひかざす我が君り君

征韓及熊襲の遺跡

香椎四近の、第三紀層に屬する、所々の丘陵は、征韓并に、熊襲に關する、古蹟少からず、當時、熊襲が跋扈せしこと、想像に餘りあり、再び茶店に戻り、十時二十七分發の、瀛車にて、香椎驛を發しぬ、此瀛車は、春日驛一番發にて、車中頗る雜沓せり、沃木少將、平井副官も、車中よあり、大分、宮崎兩縣、徵兵員抽籤の爲め、臨監すと云う、乗客の夥しかりし爲め、着車の時間大ふ遅刻し、午後一時、漸く門司に着せり、古賀文支店に投ずれば、釜山行瀛船は、税關の都合により、馬關に碇錨するを常とす、故に一浴一飯の上、匆匆馬關に渡らんか爲め、波止場に至れば、小蒸瀛己に待つ、遂に馬關に渡り、瀛船白川丸に乗組む

門司馬關の兩港

白川丸は、大阪商船會社所有瀛船にして、凡そ五日間に一回宛、大阪を發し、釜山に定期航行するものなり、船脚凡う十湮なり、と云ふ、出帆を待つ間、馬關門司兩港の間ありて、甲板上より、其形勢を視るに、此處ハ、瀬戸内の關門にして、其兵要に於ける、其商業に於ける、實に我國の要口なり、魯領朝鮮支那等の衝

征韓及熊襲の遺跡

門司馬關の兩港

に當るものは先づ此の關門とす而して門司馬關兩港と共に外衝の地形に對しては宛然たる一大港なり然るに其行政管轄の異なるを以て門司馬關は全く各別にして近來は共に反目競争の姿さへありと是れ甚だ不利なるものにして能く世の經世家が謂へる如く是れを一港として利害を共にし其改良繁榮を計るに於ては他日大に見るべきものあらん

日本を發す及朝鮮近海の景

間もなく時間は來れり船は萬里の長風を破りて進行を始めたり斜日暮風殆ど日本を去るの感に堪へざりし船長門の御泉崎と藍の島との間を離るれば水天一色森々として陸影を見ず西伯利風北風は直に日本海を掠め來りて波濤碎けて雪をなし甲板上に立つに堪へず室に入りて枕に就けば既に眩迷して困頓するものあり夜半對馬海流は船の左舷を拍つて北風益々加わり船舳動搖甚しく少しく船艙を感じり勉強して一睡を貪り覺れば東雲已に紅に朝鮮の山峰模糊の間にあり滿船の風色は既に郷國にあらず朝鮮の屬島なる五六島釜山浦口の島にして陸より見れば五選からず漸く進めば絶影島は其形象頭の如く前面に横はれり甲板に出で噴望を把れを船

日本を發す及朝鮮近海の景

將に釜山海内に進入せんとし韓船の處々に浮ぶを見る韓船ハ船幅廣く帆は筵を用ひ紅或は白の細長き旗二旒乃至四旒を打ち樹て甚だ雅趣あり日本漁船も亦少からず是れ多くは馬關近傍若くは對州肥前等の漁民なりと云ふ

釜山港に上陸す

釜山港に上陸す

白川丸は釜山港内に投錨す税關吏日本は韓人に短艇を操せつゝ上船して船客の荷物を點檢す檢査了りて船客一同上陸すれば波止場には居留日本人一同國人懐し氣に余等を出迎へり其間には黒帽白衣の韓人三尺にも及べき烟管を携へ徘徊するを見る直に日本租界居留地入江町旅店大池忠助方に投宿すれば同船したる兵庫縣尋常中學校長小森慶助氏も隣房に投じて刺を通ぜり是に於て氏が行を問へば朝鮮總領地方漫遊の目的にて先づ當港より内地を経て陸路京城に出で京城より再び陸路を取り元山津に出で是より海路浦鹽斯德に航するの豫定なりと云ふ是れ先づ余か心を得たるを喜び兎も角も同行するを約し其行路の如きは總領事の意見を聴く事に決し朝飯を濟し小森氏と帝國總領事館に至り總領事室田義文氏を訪

内地旅行に就き領事の談話

領事懇に、當國事情を語り、且つ内地旅行に就き、其所見を陳べて曰く、暑中、朝鮮内地の旅行は、非常に困難なり、爰より京城まで、凡う一千二百韓里、若し途中、故障なくんを、十七八日にして達すべし、道路は、人道と謂はんより、寧ろ水道にして、降雨潦をなすに遇へば、四五日の滞留は、珍しからず、酒幕宿は、韓人の矮屋にして、臭氣甚しく、夜は床蟲、蚊、虱、蚤の爲め、安眠を得ず、食物、寢具及韓錢を駄する爲め、馬二頭、通辦一人を伴はざるを得ず、若かず、當港より、元山津に航し、浦鹽に渡り、再び元山津に返り、是より、内地五百五十韓里を横ざりて、京城に抵り、仁川を経て、歸航せんには、是に於て、之に決し、其他、當國に關する種々の談話を聞き、歸寓す

釜山の氣候及地質

釜山の氣候及地質

釜山港は、北緯三十五度六分六秒、東經百二十九度三分二秒にして、我沼津、名古屋、京都等と、其緯度を全うすれども、氣候に至りては、寒暑頗る懸隔せり、今海關の實測報告によれば、其温度左の如し

氣温表(攝氏)

時期	明治十九年	全二十年	全二十一年	全二十二年
一月	零下十度	零下四度七	零下三度七	零下四度
七月	三十二度七	三十二度七	三十二度八	三十二度六

且つ、此地は、夏期雨量少く、本年も余が到着前に四十日來未だ雨滴を見ずと云う、斯の如き氣候を感じるもの、亞細亞大陸の内地性氣候に、接近するによると雖ども、抑又、當地に、森林少れなるも、其原因ならん、現に眼界の及ぶ限りの山峯は、總て秃山にして、灌木だに見ること甚だ稀なり、是れ全く、山林保護の制なく、濫伐盛なりし結果にして、其地質は、決して、樹木發生に適せざるにあらず、釜山近傍の地質は、多く、新火山岩、若くは、其飛灰、集塊、岩等より成り、松杉櫟の如きは、頗る能く發生すべき筈なり、故に幸に、斧斤を免れたるものは、松柏科の植物、稀に孤立するを見る

釜山居留地の光景

當時、日本居留地には、日本家屋は、凡そ一千戸、在留人四千七八百あり、然れ共、

釜山居留地の光景

羈旅の客を加うれば、常に七千に及ぶと云ふ。居留地には、小學校あり、郵便電
 信局あり、病院あり、第一及第百二銀行支店あり、郵船會社支店あり、總代役所、
 商法會議所、公園等皆備わらざるなく、宛然たる一小殖民地にして、身の海外
 にあるを知らざらむ、市中を往來する人物は、日本人、韓人相半し、朝鮮人は、
 例の白衣黒帽にして、ステッキ然たる、烟管を手にすることは、盡く同一なり、
 間々貴人（人）の色衣を着け、轎に乗り、人をして昇かじめ、往來するあり、又貧民
 は、汚穢なる粗服にて、我國俗に瘦せ馬と稱する如き、支機（チキ）と呼ばれたる、一種
 の負（ヒ）子を脊に負ひ、牛脚となく、野菜となく、之に入れ、炎天に曝しつゝ、一種
 の賣聲を放てり、例へば牛肉なれば、「ウレヤス」、「茄子なれば」、「ナスビガ」等
 の、片言交りの、日本語にて連唱しながら、行商せり、余、牛肉を嗜むと雖ども、流
 血淋漓たる牛頭等を、怪しげなる「チケ」に入れ、炎天に曝すを見ては………と
 て一笑せり

朝鮮人の風俗及習慣一斑

朝鮮人の風俗及習慣一斑

居留地を徘徊する、韓人を見るに、何れも、体格は強壯にして、偉大なり、身長平
 均凡そ五尺六七寸なるべく、鼻隆く、眉秀で、鼻下及颯に疎鬚を蓄へ、容貌頗る

温雅なり、髪は組みて垂れたるものと、頂上に鈿もて纏ひ、而して、帽を頂くも
 のとの二様あり、聞く、垂髻（チキ）する者は、未婚者にして、之を童蒙（チモン）と總稱し、人権甚
 だ卑く、又其加冠（カカン）するは、既婚者にして、之を大人（チンジン）と稱し、家格の如何を問はず、
 必ず未婚者の尊重せざるべからざる者なりと、故に資産ある者、及家格あ
 る者は、早く加冠妻帯するを以て榮とし、競ふて早婚の弊に陥れり、之を以て、
 歳甫めて十二三にして、有妻者尠なからず、且つ其妻ハ、夫より二三歳を長ず
 るを常とす、然れども、貧困者に至りては、加冠式に、多額の費を要するを以て、
 歳三十、未だ冠を加へず、十二三歳の大人（チンジン）より、童蒙（チモン）々々として、蔑視せらるゝの
 風は、他の見る目には、頗る奇異の觀あり、履物は、蹠製、若くは革製の履を穿ち、
 腰間には、常に二囊を吊るす、一は烟草を入れ、一は鏡棉及箸を入る、若し小間
 あれば、鏡を照して梳るは、男子一般の風なり、又喪は、甚だ之を重んじ、三年必
 ず之に服す、途上素布にして、深笠を被るものに逢ふは、服喪者なりと云う、斯
 く禮を重ずる一方には、彼等が途上に、知人と相遇うも、互に禮するものを見
 ざるは、一奇なりし、余等は、今日まで、未だ朝鮮婦人を見ず、居留地を徘徊するも
 のは、皆男子のみなり、凡そ朝鮮の婦人は、男子に其顔を見らるゝを耻とす、况

して、外人は猶更なり、故に外國人の居留する、租界には、婦人は足を容れざるの習慣にて、日本租界の境標までを限りとし、來ると云う以上、の如き、偉大温雅の先生等が、日本店中、少し珍しげなる所には、集ること、蒼蠅の如く、追へば又來り、堂々衣冠の人士にして、日本小兒の、嘲叱、翫弄を甘ずるは、既に彼等が容貌に似ず、其無氣力を表して可笑し

朝鮮人の生活一斑

居留地内、所々を散歩すれば、市の西端、西と稱する所に、韓人の住家五六戸あり、汚穢貧窶の狀實に甚しく、中に、賣店然たる所あり、矮屋、無壁の下、亭主中央に坐し、韓客七八人之を環りて、剛坐し、韓錢を出しつゝ、飲食するの狀は、乞丐小屋に似て、其不潔は、恐らくは是よりも甚しからん(後日に至りて思ひ合地近くにてまだ上等の住居ありし)

居留地雜事

日本居留地には、遊宴酒食などは、随分流行するものゝ如く、割烹店は、頗る肥へ、東京樓待合亭、京阪亭の如きは、其大なるものなり、諸物價は、内地に比すれば、少々高直にして、宿泊料は、普通は、三拾五錢内外、摘髮料十錢等なり、氣候は

居留地雜事

朝鮮人の生活一斑

前顯の如く、不順なれども、此日の温度は、正午、八十八度にして、夜に入り、海風涼を送り、午後九時には、七十九度に降り、此日熊本と同時觀測の報によれば、熊本は、正午九十度にして、午後二時には、百度九に達し、本夏の最高温なり、と云ふ、因に記す、以下記する氣象上の紀事は、熊本と同時觀測を約したる所にして、熊本云々と記するものは、比較の結果なり、但し、氣温のみを載す

朝鮮婦人の容貌并に衣裳

七月廿七日朝七時に於て、七十九度(八十二度)午前九時出發にて、小森氏と共に、韓人の巢窟なる、草梁洞、及釜山浦に遊ぶ、草梁洞は今、新舊二村に分れ、新草梁洞は、居留地の西にあり、或は之を富民洞と云ふ、舊草梁洞は、居留地の北なる一小阪を隔つる下にあり、故に日本人は、之を阪の下村と稱す、韓人も亦た之に倣ふ、此日遊ばんとするは、即ち、阪の下より、居留地の市街を離れて、一小阪を登れば、半腹に日本租界の標石あり、即ち日本居留地となり、韓の婦女等、此境に於て、胡瓜を販ぐ、あるを見る、其容貌皆粗陋にして、男子の端正なるに似ず、服裝は、襦と稱せられたる、短きこと、乳房を掩ふに足らざる上衣を着け、下衣は、裳と稱する、褶多き袴を用ゆ、上下衣の間には、腰帶と稱する、帯を纏ふ

朝鮮婦人の容貌并に衣裳

て腹部を蔽へり、然れども乳房は蔽ふに由なく、現はれて歩々房々たり、後姿を瞥見すれば、西洋婦人の服装に似たり、衣裳の地質は男子と全じく、悉く(平民)の晒(サシ)なり、當國の制、平民の衣服は、男女共白布にあらざれば、用ゆるを得ず、故に、布衣若くは、白衣と云へば、無官者の代表なりと云ふ

朝鮮固有の臭氣始めて鼻を撲つ

阪頭には、稅務使の公館あり、韓人の矮屋所々に點散せり、余等は疑へり、是れ人類の棲むべき物にあらざるべしと、然れども奈何せん、見に之れに出入し之れに起臥する人物あるを、而して一種の惡臭——朝鮮固有の臭氣は紛々として、始めて余輩の鼻を撲つて來れり、是に於て、余輩は忽ち一種の感想を呼び起されたり、先づ第一には、此の有様にて國家と謂へる組織の實行せられ得るや、國民に進歩、改良の念あるや、清潔の感念あるや、又臭覺ありや、否の疑なりし、之を過ぎれば、監理衙門あり、即ち地方官廳なり、其建築は民家の陋狭なるに似ず、丸瓦を以て之を葺き、屋根裏は紅綠等に彩色を施し、屋頭は白堊を以て厚く之を塗る、恰も是れ積雪の景なり、此建築は日本職工の手に成れりとす、此邊より韓屋多く連續せり、當國民家の構造は、大小及精粗等、概ね

朝鮮固有の臭氣始めて鼻を撲つ

韓屋の構造

大差なきを以て、爰に其構造の大要を述べん

韓屋の構造

抑々韓屋は、其高さ僅に六尺五寸乃至七尺に過ぎず、曲屈ある鹿箬の小材(多松一尺位)を以て柱とし、掩ふに藁或は茅を以てし、繩網を以て縱横其上に張る、藁葺の下は小枝を横へ、粘土を以て其間隙を塗れり、壁も亦粘土を厚く塗りたるものにして、中腹には凡そ三尺四方の牕を設く、之を出入の口とす、床は粘土を以て、高さ凡そ二尺に塗り上げ、板石を以て其上を掩ひ、床下を中空にして、竈と相通じ、竈の火氣及び烟の自在に床下を通じて、寒中床を暖むるの製とす、之を温突と稱す、又火氣、烟は屋後に烟突ありて、之より誘出す、室内は概ね別ちて三室とす、曰房、曰廳、曰釜屋、是なり、房は平居寢室を兼ね、床下に温突を通じ、別に婦人常居の室を女房と云ふ、廳は客間の如きものにして、釜屋は庖厨とす、一室多くは三疊計りにして、四疊より廣きは稀なり、故に一家の總建坪は、我三坪乃至六坪を常とす、其狭小なる推知すべし、一般に雅致に乏しく、椽側なく、建具なく、室内に掛け物、扁額を掲ぐるものを見ず、更に庭園、挿花盆裁等の如きは、絶てなき所なり、増垣は石片を泥土にて混じ、高さ五

尺計り、屋に接して而して之を四圍し、出入の一方を開くのみ、其窮屈なることを言はん方なし、要するに韓屋は、全く冬寒を防ぐの製にして、夏期に適せず、暑中と雖とも、炊時毎に火氣は温突を通じて、床席燉くが如く、土室窓戸狭くして、空氣の流通を妨げ、加ふるに四圍の土垣は全く外氣を遮斷せり、之を以て人々、夏は屋外に眠り、屋外に食し、室内に居るもの少し、然れども、婦人は他人に逢ふを耻辱とするの習あるを以て、可憐此深窓？中に糸針を事として、日を終ると云う。

韓人の室内耕作及其村落

室内の家具を視るに、釜、竈、籠、製、金屬製の椀、其他二三の食器の外、殆ど之を有せず、人は懶惰風をなし、偃臥して烟を吹くもの、或は途上に坐するもの、或は樹下に眠るもの、或は圍碁するもの等にして、稀には業を操るものあり、商業言ふべくんば、は諺に曰ふ、狸店にて、路傍に筵を延べ、草鞋、葉烟、艸類を列たるもの最も多く、間々組み糸、飾り玉、まつち、硝子鏡、小刀等の日本より輸入せる雜貨、小量を賣るものあり、又食物を販ぐは、石花茶芽しの煮物、鱈の牌の目切り身の既に腐敗して臭氣を放つもの等にして、一見嘔吐を催さんと

韓人の室内耕作及其村落

す、且つ途上の放尿は、驕陽に蒸され、路傍の堆糞累々として、歩を遮り、加ふるに到る處、瘦犬猶々として余輩を吠へ、不快堪ゆべからず、韓人余が五中の正帽を被るを以て、囁目して日本人軍士の聲、屢々聞ゆ、村の中程に理事府の扁額ある官衙あり、則ち支那領事館なり、黃龍の國旗空に懸るを見る、館の近傍に支那商店十數個あり、皆小店ふして雜貨を販ぐ、是より再び、韓人陋屋の間を過ぎること暫時にして、陋屋漸く盡きて、田圃の間に出で、自然の青々を見て始めて深呼吸を試みたり、田圃の景況を見るに、土壤は火山岩より成る、稍々養分に富める沖積層にして、見渡す所、凡そ五十町歩もある耕地にして、稻田其半に居る、其植む方別に日本に異ならざれども、稍々密植し發生佳良ならず、是れ全く肥料を與へざる結果ならん、畑は多く大豆及小豆を植へ、日本にて見來りしものよりも、未だ甚だ稀少なり、農夫は鋤と稱する鎌様のものにて、畑畦の草を取り、又は地を打返へせり、四圍の山は悉く秃山にして、只結草を生ずるのみ、稀に赤松の孤生するを見るのみ、村落中に於けるも、樹木なく、竹林なく、又は叢林だもなし、只赤土閃々たる土上に、矮屋の羅列するのみにして、紅塵時に面を撲ち、景況甚だ寥漠たり、此の田圃の間を過ぎれば、即

ち釜山にして或は之を古館と稱す是れ從來我日本館を置きし地なり陋屋の連續するは草梁に異なることなし釜山鎮は村の中央にありて壘を以て環らす城門には金壘門と標す後背の岡に城趾あり壬辰の役小西行長一朝にして之を陥れ守將鄭撥を擒にし據りて韓兵を挫きし所なりと云ふ余等は歩を是より返し不潔なる民家の間を通じて正午前居留地の旅宿に着せり

龍頭及龍尾山

午後三時當港日本共立小學校長武光祥藏氏來訪せらる室田總領事の紹介による氏は千葉縣人にして二十二年春來任せりと云ふ種々當港教育上に付對話の末明朝學校を參觀することを約す此日正午の温度は八十四度(龍頭)夜に入りて七十八度に降る市中を散歩すれば龍尾山は龍頭山と相對し亂松の間加藤祠廟を祭る三五の満月は絶影島上に出で玲瓏萬里頗る今昔の情に堪へざりし

釜山に於ける日本小學校

七月廿八日晴天朝八十七度(龍頭)十五度(龍尾)前八時より小森氏と共に當港小學校

龍頭及龍尾山

釜山に於ける日本小學校

を見る校舎は港の西部龍頭山下にあり教員七名皆内地人なり生徒三百二十名あり諸事頗る整頓せるを覺ゆ高等尋常の兩科各級悉く備れり課程は内地の教科と異なるなきも只英語及韓語の二科は尋常科より之を課し頗る重きを置けり武光校長の案内により各教室巡覽の後生徒の作文を見る字形文脈の優等なること逆も内地小學生徒の比にあらず蓋し居留人は何れも内地との關係を有し書狀は實際に其必要を感ずるによるべし又教師の言に生徒の多くは當國に生れ曾て日本の郷土を踏みしことなく隨て韓國の實況を知るもの少し是を以て日本の實況及び國家の感念を興ふるに大に苦心を要す是れ内地と自ら異なる所なりと實に然らん當校は始め本願寺派出僧の手にありて寺小屋風なりしが室田總領事赴任以來銳意改良して遂に明治二十二年小學校の組織となし維持金も領事自ら率先して資金を抛ち以て他の居留民の寄附を促し又餘剰金等あれば悉く之を學校維持金に加へ以て漸次獨立の方針を取れりと又朝鮮人をして我に懐けんには先づ教育より誘導する小若かざるを以て韓人の子弟の我學校に入學することを許し現に入學して日本語を學びつゝあるもの既に二十名に及べ

國家に對する
朝鮮人の思想

り此等の子弟には先づ普通科を課し尙ほ進んで醫術を修めしめんとす是れ彼等を導くの一方便ならん等の談話ありし

國家に對する朝鮮人の思想

學校を辭して領事を訪ふ先づ川上書記生に就て元山京城間の旅行實檢を問ふ氏は曾て兩地間を旅行せし人なり余等亦内地を横ぎるの豫定なるを以て益せし所少からず次に室田總領事は當國事情に就き語りて曰く朝鮮の國家團結は頗る薄弱なりよし國民の總てが悉く國家的觀念なきにあらざるにもせよ其の感に至りては甚だ模糊たり只々兩班兩班とは文武官の總稱にして文官を東班武官を西班と云ふ士大夫以上は就官するを得るの制にして官野を論せず此格以上を云ふ以上には忠君愛國少くも其意等の思想あるも而も現王は咸鏡道出身の系統に屬するを以て恰も共和國民が大統領に於けると一般若し現王室にして倒るゝあらば又他姓の之に代るものあるべしと云へる位の考を有せり又日本及支那に對する傾向を察するに人民は勿論其政府も近時益々日本に意向あるは事實に於て明なりと雖ども奈何にせん彼我文化の程度既に大に懸隔し彼等の粗雑にして萬事單

簡なるより視れば我が所置は總て鄭重に過ぎ寧ろ面倒と謂ふ感あり或點に於ては却て支那の未だ粗速なる所置こそ之を好むが如し例之今回黃提島殺傷事件の如き我は充分に事實を探究し彼の政府及地方官等と數回辯難往復し證據確認の上本國政府の訓示を待ち始めて之を所置すと雖ども若し事を代へて支那とせんか只袁氏(袁世凱)一個の諾否を以て事既に決せんのみ故に日本との交渉は面倒なりとて之を避けんとする風あり若し一事の照會を發する等のことあれば又例の面倒なる規則ならんとて彼の官吏は先づ壓縮するを常とす是れ固より社會程度の高卑實に己むを得ざるによると雖ども抑又對韓上一の障害ならんとの談話あり余は當測候所を觀んと欲するを以て領事の紹介を得て測候所を訪ふ

釜山測候所

釜山測候所

釜山測候所は郵便電信局内にあり局長松村昇一氏に見へ觀測の景況を問へば専務の技手なく電信技手二名に囑托して觀測せしむる由にて技手二名を余に紹介せり案内によりて所内の觀測器を見るに氣壓計寒暖計(最高最低)風信計雨量計等あれども皆完全と謂ふを得ず特に雨量計裝置場の

不適當なること、最高最低寒暖計及風力計の備へなきこと、風信計の不完全なるを等は、最も改良を速ぐべきことにて、當地は日本氣象の關門となり、少からざれば、種々注意の點等を談じ、歸宿すれば、武光氏來訪、當國に關する種々の書籍を貸與せらる

釜山の海水浴

釜山の海水浴
晩食後市中を散歩し、遂に室田領事の海水浴場に至りて浴す、潮水は鹽分多く、海水浴には最も適すと云ふ蓋し此地は雨量少く、且つ對馬海流の一派、釜山灣内に進入するによるべし、其の證としては、氣温の低き日には、海表烟霧深く、冬期に至れば、地表一尺程は海温の爲め、氷結せざるも、以下は却つて氷結すと云へり

加藤清正の虎狩山

加藤清正の虎狩山
浴を出で、西郊に散策すれば、西北方凡そ一里の所に、九德峴と稱する一嶺あり、文祿の役、藤肥州の猛虎を狩られしは、則ち此峴なりと傳ふ、繪に見たる所にては、老松翁鬱として、珍叢翁を掩へども、今實際に望みたる處にては、松も叢もなき例の禿山にして、虎杯の住むべき所とは思はれず、併し朝鮮の虎

釜港監理署より與へたる護照

は、常に斯る禿山の崑崙中に住むと云へり

釜港監理署より與へたる護照

七月廿九日、晴朝、八十七度(八十四度本)昨日元山津より入港したる薩摩丸、本日當港拔錨、内地に歸航するを以て、午前は在宿して書狀數通を認む、正午温度九十度(九十度本)午後總領事館を訪ふ、中川高等中學長より、余が高等中學教官なるを證明するの電報あり、是れ我内地旅券を受くる證明なり、又明朝より當地出發、東萊府及金山温井を経て、蔚山の藤肥州の古城趾を吊ふの豫定なるを以て、室田總領事より、東萊府使、李鎰生に宛てたる、紹介狀を請ひ、又内地保護の爲め、釜港監理署より、蔚山僉使に宛てたる護照を得たり、護照(内地旅行券の如し)左の如し

蔚山府

公 兄

開 拆

私通、日本學校長小森慶助、學校教官矢津昌永、兩員、遊覽次、方爲前往本邑等地、所到處各處、格別護送、母至中間生弊之地、幸甚爲乎乙事

癸未六月十七日

釜港監理署會計書吏

朴

朴とは、朴珥崇にして、氏は久しく日本に遊び、日本語を能くし、頗る我國の事

蔚山へ旅行の程に上る

情に通ずる、文明的人物なりと云ふ、夜川上書記生來訪せらる
蔚山へ旅行の程に上る

七月三十日、朝八十三度(熊八十二度)今朝蔚山に向て、余等朝鮮内地旅行第一着の程に上る、日中は午熱甚しきを以て、早朝程を發するが爲め、早起旅装を整へ、而して昨日宿亭に命じて、雇はしめたる、余等の通辯兼案内者なる、韓人金書房(キム)の來るを待つ、漸やく八時前に至りて來る、彼等韓人の緩慢、約束を守らざることを、總て斯の如し、然れども、是れ其常にして、深く咎むべきことにあらずと云ふ、則ち金書房に、途中の必需品を負はしむるもの下の如し、
○韓錢 四貫文
○醬油 一罇
○酒 一本
○清水 一罇
○漬物 一苞及其他雜品とす、今此等携帶品に就て、途中其必要を記すべし

余等の携帶品

(一)韓錢、朝鮮は今尙ほ青錢を用ね、他の貨幣並に紙幣を用ねず、而して其爲換相場は、隨時高低ありて一定せずと雖ども、現今は十五割と稱して、韓錢一文は、我一厘五毛に値す、携ふる所の四貫文は、四千文にして、僅に我六圓に直するに過ぎず、余等二人、四日の旅行をなす、少くも四五貫文を携へざるべから

余等の携帶品

故に若し、十數日に亘る旅行をなすときは、路用の韓錢を駄する爲めに、馬一疋を伴はざるべからず、其不便知るべし、
(二)醬油、内地旅行するとき、韓人の酒幕に宿し、韓食を食せざるべからず、然れども、初度の旅行者は、韓屋並に、其食饌に、一種の惡臭あるが爲め、嘔氣先づ催し、之れを食ふの勇氣あるもの少なし、故に携ふる所の醬油によりて、鶏卵を食するの一事のみ、
(三)酒、夏期内地を旅行するは、實に不愉快にして、不潔、惡臭は、言ふに及ばず、夜は、床虫、蚊、虱に襲はれて、安眠を得ず、故に酒幕に宿して後、一盃の酔を買ひ、陶然眠に就き、以て明日の困苦に堪ゆべき豫備をなすこと、最も必要なり、
(四)清水、朝鮮は到處、清水に乏しく、路傍偶々涌泉あるも、多くは惡水にして、飲むに堪へず、又韓屋に就て、水を請ふは、一層危險にして、時に或は釜の洗ひ汁、又は不潔を混ざる濁水と與ふ、故に兼て水罫を携へ、若し清き湧泉に逢はば、之を汲み取り携ふることは、是又必要の事とす

草梁の村に於ける金の住家

斯くて諸般の準備、全く整ひしかば、午前正八時發程、路を西北方に取り、居留地を経て、舊草梁洞を過ぐ、汚穢にして臭氣の芬々たるを、固より甚しと雖ど

草梁の村に於ける金の住家

も亦前回の如き非情なる不快を感じず、然れば余等も已に幾分か習慣せしもの乎阿々草梁の村は、金書房が居村にして其間を過ぎれば、彼は余等を誘ふて其家に慰はんことを勸む、故に誘ふが儘に至り見れば、余等を廳の正坐に請せり、然るに家人は余等の至るを知り、早く已に裏口より逃れ去りて家に在らず、茶は勿論水だも尙むるものなし、金は居留地に於て日本人に雇はる、韓の人足頃の由にて、彼の國の士大夫に相當する輩なりと、年齢は當年三十三にして、不完全ながらも日本語を解し、其他日本の風俗習慣は、常に欽慕する者なり、顔面は痘痕の爲め、痛く其相を破られたれども、鬚髯を蓄へ風品賤しからず、家には老母姉及妻あり、妻は當國の風にも拘はらず、金より若きと十一年、即ち二十二歳にして、而も新婚なりと云ふ、門は粗末なれども、開き門戸を構へ、家屋も比較的に廣く、且つ清潔なり、而してアンペラ製の目隠し一つ隔つるは、則ち隣家なり、余試みに之を覗へば、若き婦人の頻りに手杵を以て、春くものありしが、余の帽影を見るや、速しく逃れ避けたり、屋内には男子の鏡を照らして容貌を修するあるを見たり、余等が金の家に休憩する間は、家人等は悉く屋外に隠れ、屋後の窓外に立ち、狐狸の如き状をなし、窓隙

より余等を説諷す、我れ見れば、彼れ直に隠れ見ざる時は、即ち覗ふの狀實に可笑しかりし、國風とは言ひながら、何ぞ其れ奇習なるや、此上に聞きたきは、余等の去りし後の批評なり。

醫師及賣店

醫師及賣店

金の家を辭して、草梁を過ぎれば、釜山古館なり、海濱に釜山城郭を存す、郭の周圍方二町計り、褐色の火山岩を以て疊む、壘の高さ凡そ二間あり、恰も煉瓦屋の焼け跡を見るが如し、郭内には覆の大樹數株あり、之と相對して西の岡上に壘あるは、則ち小西の城趾なり、釜山は草梁に比すれば、人家稍々多く、凡そ一千戸ありと稱す、進むに従ひ、茅屋列を成し、頭上物を戴く婦人、裸躰跣足にして、其腹は褌の如く脹れたる子女等、途に充つ、屋内には戴冠有髯の人、詩を吟じつゝ業を操るものあり、間々矮屋の窓戸に、藥局或は神農遺業と記するものあり、是れ當國の醫師にして、賣藥店を兼ねるものなりと、言へど、余等は其醫師たり、藥劑たりを見出すと、能はざりし、若し病人の藥を乞ふことあれば、病症の如何に拘はらず、怪しげなる一品を古びたる罇中に探りて、之を服せしむ、故に一旦病に罹るときは、自然の快復を待つか、但しは死を待つ

の外なしとなり、又筆房、杯と記すれども、賣品は目に觸るゝことなし、唯々商
品とも思はるゝものは、路傍に圓形の草蓆を敷き、胡瓜、玉蜀黍、林檎、駄菓子等
を臚列するものあるに過ぎず、其外には、小魚を穿木に盛りたるもの、牛股を
粗上に載せたるもの、及羊豚犬の丸煮を賣るもの、各々一店あるを見たり、凡
て怠惰、不潔、陋隘等は到る處目に映じ、中央亞弗利加も斯くやと思はれたり、
漸く村を通過すれば、樹木なしと雖ども、青峰綠田にして、始めて爽快を覺ゆ
るに至れり、携ふる所の清涼劑を、行李に取りて、飲用し、邪氣を拂へり、一の川
道を過ぐ、河身水なく、砂礫のみ、釜山河と云ふ、降雨に際すれり、往來杜絶する
ものなり、今は日、亭午に近し、路傍に樹木の息ふべき蔭なく、花崗岩の露爛し
たる細砂は、烈日の反射を送り來りて、顔面爛るゝの感あり、寒暖計を檢ずれば、
九十八度を示せり、(熊本八十七度西の涼風ありと云)此邊鵲(或は我邦にて)多く、人の至るを
恐れず、余短銃を操りて、屢々之を狙撃す、頗る愉快なりし、然れども、土民等、銃
聲を聞きて恐怖せりと聞き、之れを止む、將に東萊府に入らんとす、路傍に一
小茅屋あり、就て息ふ、家に瓜、玉蜀黍を賣る、男女七八人、或は瓜を食し、或は烟
を嘯き、談笑するあり、余袖時計を出して、檢すれば、集る所の韓人珍らし氣に

之を環視す、五月蠅きことなりし、遂に東萊府を望めば、高さ五百尺の丘麓に
より、胸壁、蜿蜒として、長蛇の如く丘を環れり、壁内には人家填充し、戸數凡そ
三千あり

東萊府に於て官家を訪ふ

既に府に達すれを、城門あり、洗兵門と云ふ、石を以て疊み穹形をなし、上に樓
閣を置く、無憂樓の扁額あり、種々の彩色を施せり、凡そ數百年前の建築なら
ざるべからず、所々破損し、瓦上草生ず、府門を入れれば、多くは官家にして、正面
に府廳あり、府使の官邸、其傍にあり、府廳の構造は、恰も我寺院の如し、洗兵門
を入りて、左側に番所の如き官家あり、金をして余等の至るを告げ且つ、府使
に面會の事を通せしむ、既にして譯官、衣冠を繕ひつゝ、出で來り、一體して、片
言交りの日本語を以て、(弱國の強國に對す、常に斯の如し)府使に面會の爲め來りしかを問
ふ、余等然る旨を答へ、總領事より李氏に宛たる紹介狀を出して之を示す、譯
官余等を導きて、報遺所と標する官家に至る、官吏五名あり、或は書し、或は談
ずるものあり、想ふに府の外務掛ならんか、記録を見るに、皆卷き物にして、帳
簿にあらず、譯官は暫く所長と嘯々して、余等に向て曰く、君等は軍用なるか

東萊府に於て
官家を訪ふ

將た私用なるか蓋し服装によりて余を軍人と誤認せじなり余私用を以て答ふ是に於て急に言を和らげ内に請じて毛布を敷き之に坐せしめ所長は紹介状を持して府使李氏の官宅に至る待つこと須臾にして返り來り譯官によりて曰く紹介状は之を李伯に致せり然るに李頃來腹痛往々嘔吐を催し時に或は人事不省に至ることあり若し貴客應接中斯の如きことあらば無禮甚だし聞く貴客は蔚山に遊び歸途再び弊邑を過ぎらるゝと故に若し歸路訪はるれば疾も恐らくは癒へ必ず歡迎するを得ん暑中の訪問多謝と是に於て自重加養を傳へて發す蓋し聞く李氏は任滿ち解任近にあり且つ例の當國通辭ならんと語れり然るに後日室田總領事より傳ふる所によれば李氏は翌日直に書を領事に贈りて偶々の來訪痢疾の故を以て面晤を得ず遺憾なりしとの旨を謝せりと府市を過ぎて郊外に出で行くあと凡り一里即ち金山温井なり

金山温井

浴場は朝鮮古代の建築に係り其狀寺院の如し浴室は中央より兩分して一を日本人の浴室とし他を朝鮮人浴室とす日本浴室は男女の兩浴場に分ち

金山温井

各々花崗石を以て湯溜とし清潔なり泉質は硫黃鐵を帶び透明なり温度は甚だ高く凡百七八十度ならん故に放冷して後浴す皮膚病癩癧質斯等に効ありと云ふ日本浴室は對州人小林喜作なる者之を預り居れり一浴すれば甚だ爽快を覺へたり宿所は韓人の茅屋なれども他のものに比すれば稍々清潔なり清風自ら來りて涼を覺ゆ囑目すれば土地は皆蠻民の爲めに蹂躪せられ汚穢せられたれども獨り蠻人の手の及ばざる清風は自在に天然の綠葉を煽り來りて座間に到る嗚呼自然は實に無偏なる哉食後晚涼に乘じて戶外を散歩すれば田間處々には白群の農夫あり田の草を取る調子能き一種の唱歌を連唱す又蠻聲を放ちて村より村に相呼應するもの晚風に送られ來りて頗る奇なり此夜始めて韓人の手に調理されたる韓食を喫して韓人の茅屋中に眠る

韓人の食物

久しく當國にありし或る軍醫の説に韓人の食物は日本人の食物よりも比較的滋養に富めりと言ふ或は然らん今序に韓人の食物を記すべし朝鮮は米食人にして米を以て重なる食物とし間々大豆小豆麥を混するもの

韓人の食物

あり、米は日本の如く丁寧に精げず(尤モ)故に米粒に斑點あるを、恰も掃除を怠る、喫烟家の齒の如し、炊き方は頗る軟かなり、食膳には、ソツプを置く、然れども其調理法に至りては甚だ不快の感あり、ソツプの製法ハ酒幕の如きは必ず大なる一個の釜を備へ、牛又は其他獸類の肉を去りたる骨髄、頭腹、腸に論なく之を釜中に投して煮るものなり、而して一週日若くは旬日以上も釜中に置くことあり、其汁に胡椒味噌を混じて、飲用す、又魚類は新鮮なるものを好まず、故らに放置して腐爛に傾き、臭氣を放つものにあらざれば、好て食せざるものゝ如し

金山を曉發す

七月三十一日、晴朝七十九度(熊七十九度本)早起馬に跨り、金山を發す、金山四近の平地は、梵魚寺山の花崗岩連山と、其東壁をなす、第三紀層丘陵との間にある、第四紀層にして、花崗岩の土壤より成る、第三紀層の丘陵には、青松疎々として生じ、曉風面を吹て爽快を感ぜり

機張途上の所見

朝鮮の馬は、體格小にして、驢馬の如く見たる處、遠路の騎行に堪へざるが如

金山を曉發す

機張途上の所見

い、なれども體の割合には、頗る強壯にして、且つ感能く、自ら道を究めて、峻阪を踰ゆる、杯甚だ妙なり、馬を裝ふには、頭に數個の鈴を掛け、鐙を用おず、驛鈴歩々、鈴々として聲あり、太邱路より岐れて、厝峴と稱する、峻阪の路なき所を過ぎて、機張路に出づ、河あり橋なし、河積には、ハンセイと稱する、惹に似たる白鳥の一群あり、河名を東川と云ふ、午前七時止敬と稱する一小村に着す、金及び馬子の朝食をなすが爲め小憩す、此處は酒幕にして、他に兩三名の韓人も、食を得んが爲めに來憩せり、彼等の食をなすを見るに、土間の席上に團座すれば、婦人は食器と稱する、四つ足にして八角なる、膳様のものを、各人の前に運ぶ、膳の上には、眞鍮製の椀に飯を盛りたるもの、及茶數皿を置く、食前、先づ濁醪一盃を傾け、而して後、ヒを以て飯及汁を箸を以て茶を食せり、要するに、彼等の住所に比すれば、食器食品等は、稍々進歩せるを覺ゆ、止敬を發して山峽を行く、山は多く火山岩に屬す、十時機張驛に達す、機張は征韓の再役、清正壘を置き、蔚山より來りて役を盡す、時に蔚山合圍、清正急を聞きて、赴き援ふと是なり、今、戸數五百許、小岡に據りて建てられたる矮屋の驛なり、中央に機張城郭あり、今、僉使の治所とす、城郭の後丘上に、瓦屋一棟あり、稍々風景あり

るが如し、是れ僉使の後園なりと行くこと一里にして、元濱に小憩す、土民等忽ち群りて環視す、此邊天然痘流行せりと見へ、痘痕未だ覆盆子色をなすもの多く、中には痘痕未だ膿を帯びるの手を以て、余が傘を押し、履に觸る甚だ不快の感ありし

半日太古有巢の民を學ぶ

十一時半、東陽の村に達す、此村は開市の當日にして、近郷近在より、諸種の物品を齎し來りて、互に交易する爲め、白衣の男女、厩集すること夥しく、遠く之を望めば、白衣の大軍の屯するが如く、或は白鷺の群るが如し、近いて之を見れば、雜沓喧嘩言はん方なし、而して集るは婦人を以て多しとす、陳列品は、羊、鶏、野菜及魚類等にして、既に交換を終りて、物品は頭上に頂き、各々其居村を指して歸る、韓婦續々として絶へず、時正に午時に際し、且つ暑氣烈しきを以て、通辨金に命じて、午餐し、且つ午熱を避くべき所を、周旋せしむ、金所々を奔走して、周旋甚だ努む、既にして返り報じて曰く、彼所の茂林は、是れなる大人チンガムの棲家のある所、希くば彼に就て憩はれよと、依て大人に誘導せられて、茂林チンガムに赴く、大人は、鶴髮銀髯の、一老翁、彼れ深笠を被り、長杖を曳き、緩歩、余等を導

半日太古有巢の民を學ぶ

蔚山路の嶮及其地質

く、純然たる、畫中の一、道士なり、林は栗樹茂生し、綠葉最も密なる所を擇み、地上凡そ六尺の高さに、枝を束ねて棚を作り、以て彼等が夜間の臥床に供す、余等其寢所に就て、晝食を喫すれば、日光臨まず、涼甚し、覺へず一睡す、恰も是れ太古の曆日なき、巢居の民なり、余等も亦半日太古の樂を味へりとして、小森氏と相顧みて、一笑せり、爰に余等太古の閉眼を破りしは、蠻民の來集なりし、喧しき聲に、眼を開けば、樹上なる余等の臥床の下に、韓人等金に就て、頻りに余等の事を問ふ、蓋し此邊日本人の到ること甚だ稀なり、故に殊に珍し氣に、服裝を眺め、何れの兩班なりやと問ふ、金誇り氣に、日本東京の兩班なりと答ふ、其の問答實に面白かりし、時早二時に及ぶを以て出發す、是より道路險にして、馬蹄頗る艱む、處々の山丘の半腹に廢墟あり、稱して和城と云ふ、蓋し文祿の役、日本兵の築きて以て據りし、堡塞の遺跡なり

蔚山路の嶮及其地質

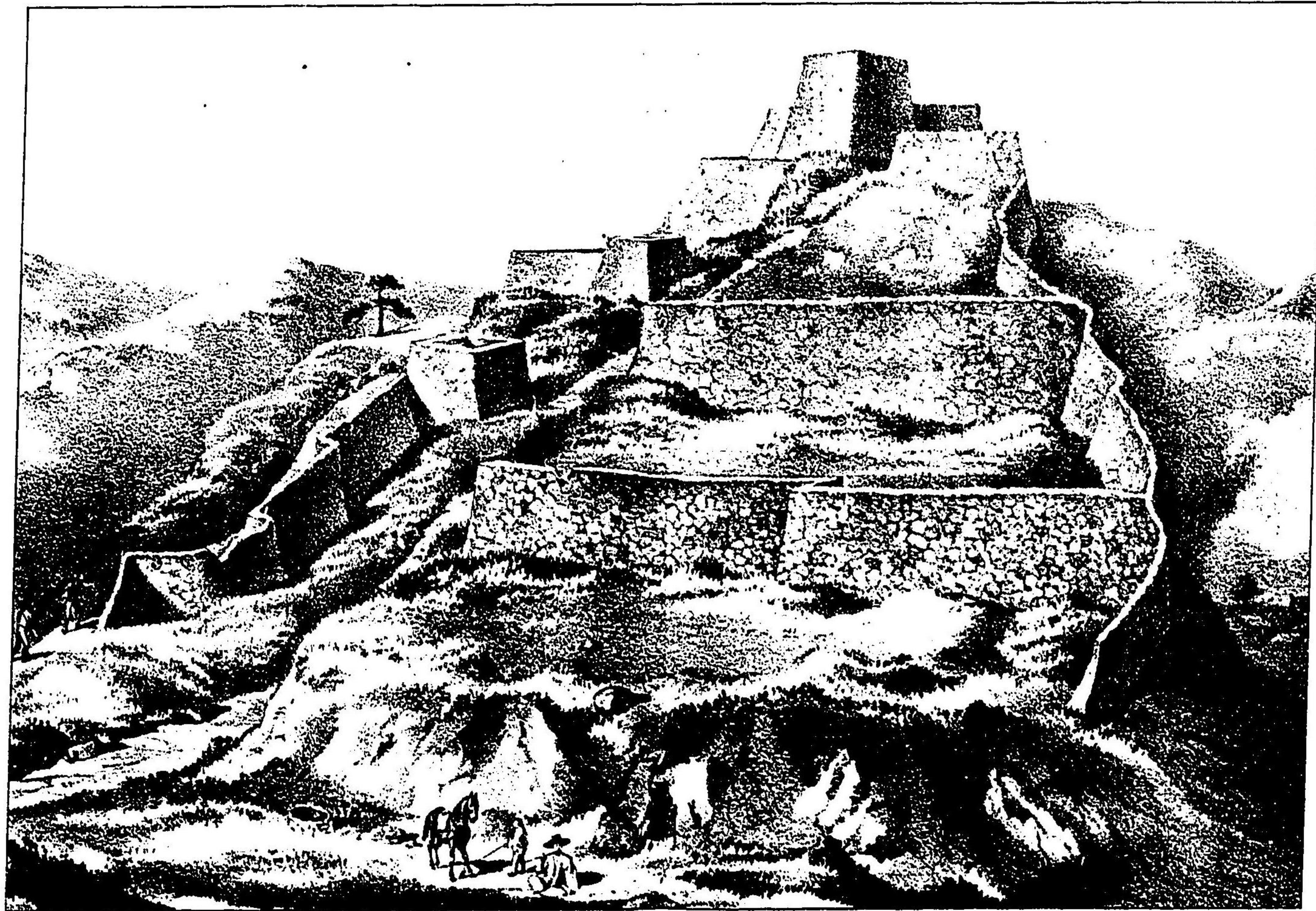
午後三時海濱に出づ、即ち慶尙道の東岸なり、是より路は、暫時海岸の村落を通じ、導びかれ、所々に掌大の田地あるのみ、村は悉く赤貧の漁家なり、海岸を過ぎれば、險阪又險阪にして、登るときは馬頭人頭より高く、降るとき馬臀

人頭を過ぐ、而して多くは火山質の山なり、征韓の役如何に兵を通ずるの困苦なりしか、想像も猶ほ餘ありし、數々岐れて小徑に入れを、遂に路なく、只々水路を傳ふて過ぐるのみ、地質は一變して、白雲花崗岩となる、此邊の花崗石は、靈爛殊に甚しく、全峯雪を積めるが如きの白禿にして、斜陽之を射り、眩せん計りなり、頑石又磊々として、馬蹄常に聲あり、今朝金山を發してより、未だ十里に過ぎずと雖ども、道路の困難なると、炎暑の甚しきを以て、人馬共に憊勞を感じ、是に於て、屢々馬を下りて、徒歩し、以て馬の勞を煩つ

蔚山城趾に登る

午後五時半、一峰を踰ゆれば、一峽地を隔つ、凡そ五百間の距離に於て、突起せる山頂に、規模の頗る壯大なる舊城趾あるを認む、是れ則ち、余等此行の目的なる、西生浦の城跡にして、世に蔚山城と唱へ、慶長二年十二月、藤肥州の據りて、以て、明の三十三將、韓の七將の合圍を受け、糧盡きて、紙を噛み、壁土を煎じ、馬を刺し、其血を飲む、馬盡く、乃ち溺を飲むと傳ふる、有名の蔚山籠城は、即ち是なり、余等覺へず、踴躍し、忽ち勇を鼓して、城趾の下に至り、熟々之を視るに、凡そ七百尺計の高さある、一丘陵を圍繞して、石壘を築き、頂上に天守台を

蔚山城趾に登る



城山ノ廢墟

置き甚だ壯大の觀あり、直に登臨を試む、路峻にして斜傾急峻往々、三十五度以上の傾きある所あり、城壘其上に聳ゆ、此阪此壘は是れ明兵の蟻附して上りたるものならん、築城の法は級築法にして、斜面に沿ひ、級々石垣を以て圍み、角々に櫓台あり、頂點に至りて一層突起したる壘を牙城とす、余屢々熊本城に登りて、其規模の壯大なる、其築城の巧智なるに感ぜり、今蔚山城を見るに、其形勢其築法頗る熊本城に髣髴たるものあるを覺ゆ、聞く熊本城の起工は慶長三年にあり、左れば蔚山城の翌年なり、藤肥州の聰明なる孤軍且つ飢渴の兵を以てして、能く明韓の大軍を挫折せしものは、城壘の要害大に其功を助けしことを察せられしなるべし、故に征韓の役既に終るや、蔚山の土工を提げて歸朝し、熊本市中特に蔚山町の一郭を設けて、彼等を住ましめ、以て熊本城の築城を助けしめられしならん、何ぞ其れ蔚山城の熊本城と相似たるや、牙城に登りて、其形勢を見るに、北は回夜と稱する一大流を帯び、南は回夜支流の盆地によりて隔てられ、西は山脈に連る、東は即ち直に海に迫る、此海は清正の機張にあり、蔚山の急を開き、海路赴援するや、明兵要して海中に戦ふ、山陽の所謂「清正自蒙銀兜、鎗杖、薙刀、立船、首指、麾士卒、明韓諸軍指

目○莫○敢○近○者○。遂○入○蔚○山○。なるもの也。數百歲の下威風凛々、尙ほ其狀を見るが如し、只々蔚山城の猷點は、飲料水の匱乏にあらんか、韓地は湧泉乏しきに、加るに此丘は、火山性の岩石にして、全山湧泉なし、僅に丘の東前面に、涓滴の泉あるを見るのみ、故に汲道は、回夜河一方あるなり、彼の役や、虜兵直に我が汲道を斷つ、城兵輒ち苦む、清正已に親しく此の困苦を嘗む、是れ熊本城内處々(天守台)に鑿井を設けられし所以ならん乎、登臨萬感の餘、日已に暮んとするを以て、城を降りて西生浦の酒幕、鄭某の家に投ず

蔚山酒幕に於ける土人の見物

鄭は、當村の俠客の由にて、推されて齋頭となる、其家は矮陋にして、凡三疊の間三室あるのみ、且つ晚炊の爲め、火氣屋内の温突に充ち、入るべからず、是に於て、屋外に蓆を敷き座せしむ、日本人來りりの喧傳は、土人の口より口に傳はり、早く已に、余等の蓆邊は、蠻人の環視堵の如きに至れり、少時の間は、余等と見物人とは、凡そ二間の距離を以て、圓を畫きしが、次第にじりく、と推し寄せ來り、遂に彼等の臭氣ある、体は、余等に接するに至れり、而して傘を把り、履を按じ、衣服を撫する等の、五月蠅き煩悶は、始められり、聞く當地には、征韓後

蔚山酒幕に於ける土人の見物

日本人の來るもの甚だ少く、陸軍中尉某、税關吏某等、僅に數名に過ぎず、故に土人等が、日本人を見しは、甚だ稀なれば、遠方より見物に來りしものもありしとぞ

西城椽門に宿す

日は已に全く暮れたり、飢渴は一時に襲ひ來りしと雖も、直に食ひ、又は飲み得らるべきものとは、一物だになし、余等が忠實なる通辨人、金は、此有様を視て、刺釀の濁醪を試みんことを勸む、其れ善からんとて、金に命ずれば、忽ち凡一升程の濁酒を、瓠器に盛り來る、大椀を以て、小森氏と互に傾け、空腹味を覺へず、相顧みて微笑す、忽ちにして、概ね之を盡くす、而して醉を感せず、既にして食物は漸くに調へり、韓童は食膳を余等の前に運べり、一種の惡臭、即ち葷腥の氣は、鼻を撲ちて、食欲は忽ち散じ、匙を把るに堪へず、強て半椀(朝鮮は凡三合)を喫す、而して亭主に心付けとして、携ふる所の寶丹一罐を與ふれば、一旦固辭したれども、遂に受けて、其懇懇を謝す、余等は蔚山僉使に宛たる、照狀を持するを以て、一村より特に優待を受け、鄭の宅は陋隘なればとて、西城椽門なる公宅に誘ふ、此家は間口三間、奥行五間位の瓦屋にして、床は板張な

西城椽門に宿す

り、想ふに村中の俱樂部様のものならん、至れば官人村翁等、座にあり、余等を圍みて、頻りに種々の問を發す、蓋し村中の有志家ならん、余等は、大に疲勞を感ずるを以て、有志等に其旨を告げ、無禮を謝して、寢に就かんとす、金は注意を余等に與へる積りにて、意を指して曰く、貴客、大小便は此所よりと、余等覺へず失笑す、眠るに蚊張は勿論、寢具の一もあるなし、是に於て、板敷を褥とし、革囊を枕に代へ、洋裝の儘寢に就く、蚊を遣らんが爲めに、枯草を焚く、燠刺屋に充ち眠るに堪へず、且つ夜半、床虫、虱、蚤等交々、襲ひ來りて、遂に余をして危座せしむるに至れり、四邊を顧みれば、寢の官人、有志家なる韓人等は、石或は木を枕とし、余等を繞りて平臥し、鼾聲高く快眠せり、實に平氣にも又憐なる官人、憐なる有志家共なる哉、此夜天晴れ氣清く、陰曆十九夜の月は、高く掛りて蔚山城頭にあり、今昔の感頻りに集り、終に夜を徹す

蔚山の市場の光景

蔚山の市場の光景

八月一日黎明、蔚山府中、螺聲高く起り、鼓聲、鑼聲、之に應ず、是れ府の各門を開閉する合圖なりと、實に久しく聞かざりし、未開時代の聲なり、今早朝出發釜山への歸途に就く豫定なりしを以て、早朝西城椽門を辭して、鄭の家就て

朝餐す、小森氏の騎馬を雇はんが爲めに、所々を搜索せしめ、遂に一二里の村まで人を馳せられたれども、漸く九時に至りて、馬なしと返り報ず、已むを得ず其儘發するに至れり

蔚山の市場の光景

蔚山の市場の光景

騎馬の搜索を待つ間に、余等は種々の觀察をなせり、此日此村は開市の定日として、朝七時頃にも至れば、近傍の村落より色々の土産を持ち寄り、此等の物品を日光に曝露する、赤土の上に陳列して、販賣又は交易するとなり、布を販ぐ、翁、豕を賣る男、魚を出す女等、實に各様各別にして、余等の如き、異邦旅客の眼には、頗る奇觀なりし、次第に人衆の集るに隨ひ、喧擾は彼處にも、此處にも始まれり、肉と野菜と代へたる肉は、未だ不足なりとて、肉屋を追ふ男あり、草鞋の代りに受けたる貝は、少量なりと罵る女あり、或は菓物と陶器との交換、牛羊販賣の談判等、總て喧騒を以て、満たされたり、鄭の宅前なる小廣きは、即ち今日の開市場にして、余等の位置は幸にも之を一望すべき好觀場なりし、且つ鄭の家は、酒幕なれば、早朝より黒帽の紳士(?)續々來りて、廂下に踞踞し、濁酒一椀を傾け、牡蠣に南蠻の味噌汁を注ぎ、快く之を食せり

酒の製法を見て嘔氣胸を衝く

然るに爰に頗る不快の一事を發見せり。并は濁酒の製法にて賣るべき酒は、早朝よりの來客に既に盡きたれば、再び元釀を出して製造を始めたり。元釀は粥程のものにて、之を篩に入れ、下に昨夜寢所の用に供したる實に怪しげの鹽を置き、篩の中なる元釀をば、穢れたる兩手を以て揉み、之に非常に多量の水を加へて濾過するものなり。故に其稀薄なるを米の洗ひ汁に異ならず、余等が昨夕空腹に味を覺へず、殆ど一舂を牛飲して、醉を感ぜざりしを、不思議のことにあらず、且つ其の容器なる鹽の如きは最も不快の種子なり。是に於て俄に神經を呼び起して、嘔氣胸を衝て至る、而して行装正に整ひたれば、出發せんとするに臨み、鄭曰く、珍客偶々遠きより來り、弊屋幸に飯食休憩の榮を得たり、今別に臨み、希くは濁醪一椀を献して、貴客の前途を祝せんと、余は是れに實に難有迷惑の至り、閉口したれども、厚意辭し難きに似たり。小森氏を顧みれを、同じく困却の色あり、然れども、事已に躊躇すべきにあらずれば、余先づ進んで其盃を受く、朝鮮の盃ハ我鉢の如く、凡そ一合半を容る、而して、滿酌一飲に之を盡くすを法とす、余法の如く、之を盡くして爰に大任を終り、盃を

小森氏に屬す、然れども、下物に至りては、臭氣ある生貝の割き身を篩の妻が手摺みに鉢に盛り、胡椒味噌汁を注ぎたるものにして、余は終に之を試みるの勇氣なかりしなり

朝鮮人の不潔驚くに堪へたり

朝鮮人の不潔驚くに堪へたり
 朝鮮人が不潔の觀念なきは、常に余等の驚く所にして、何人と雖も、終年浴するとなじ、不潔の水と雖も、平氣に之を飲料とす、食物の如きも、彼我の別なく、例へ他人の殘食と雖も、快く之を食す、故に通辨人を雇ふ時、豫め殘飯を與ふるの定めとすれば、賃銀も安價なり、朝鮮人の不潔に就き、尙一層甚しきは、總て排泄物を不潔とせず、隨所放尿するが如きは、勿論尿水の如きは、其感に於て清水と大差なく、場合によりては、手足又は顔面を洗ひ、甚しきは之を飲用するとあり

蔚山の歸途

蔚山の歸途

午前九時に至り、漸く西生浦を發するを得たり、炎熱既に堪ゆべからず、余が馬、昨日嶮路を驅りし爲め、脚を痛め疾驅する能はず、之を以て且つ歩し、且つ騎す、正午、東陽の村を過ぐ、昨日雜沓極りたる市場は、既に寂寥として跡なく、

只々無壁の茅屋と、瘦犬の食をアセルを見るのみ、村を過ぎれば松林あり、是れ韓地に於て稀有のものなり、余は村落人事の不潔よりも、天然の清麗の勝ると數等なれば、就て憩ひ、韓人の興へたる團飯の、暑氣の爲め既に腐敗に傾きたるものと、携へたる湯の如き一椀の水を以て、晝飯を食し、又發す、溫度益々昂昇して、午後一時には、實に華氏九十八度半の高温に達せり、後二時、元濱に達し、炎暑を消さんが爲め、且つは昨日來、浴せざるを以て、海水に浴す、慶尙の海は、水温低くして、久しく入るに堪へず、是れ北來の、ライマン寒流あるが爲めならん

朝鮮の馬騎者を水中に投す

四時、機張に於て、小森氏騎馬を得たり、故に兩頭相發す、路險にして石多く、殆ど足を容るゝ所なし、然れども、馬の敏捷なる、能く路を覓めて進めり、止敬を過ぐる頃は、日將に暮れんとし、温井まで尙ほ二里を餘す、險路を辿る異邦の客にありて、日暮路遠の感、特に切に心も心ならざりし、日既に暮れて、東川を渡る、中流にして、小森氏疾呼して曰く、『馬病めり馬病めり』と驚て顧みれば、氏が騎したる、馬ハ、水中に横はりて、轉輾す、馬夫馳せ來りて、イーラ(馬ヲ勵ナマ)

朝鮮の馬騎者を水中に投す

りの勦聲を以て、鞭撻を加ふれば、忽ち立ち再び、小森氏を乗せて、歩すると故の如し、聞く、朝鮮にては、馬を浴せしむるとなし、故に水流に逢へば、往々自ら横はりて、浴し、騎者を水中に投ずるとありと

暗夜虎視の險を辿る

暗夜虎視の險を辿る

夜八時半、東萊府と虎視の岐道に達す、東萊府を過ぎるものは本道にして、騎行するを得れども、既に夜に入れば、府の各門は堅く閉鎖して、通行するを許さず、是に於て、已むを得ず、虎視の險を踏へざるを得ず、虎視は、路の行くべきなく、厓に荆蕪を攔き、溪側を辿るに過ぎず、且つ夜暗きを以て、韓人等、月の出づるを待ちて發せんと乞ふ、然れども斯くして徒に、更を深かさば、温井に於て、宿を得ざるの恐れあるを以て、韓人を叱勵し、余等は、馬を下り徒歩して進む、夜暗く、路なし、相攀して寸歩を愉むのみ、或は溪に陥り、或は方向を失し、非常の困難を嘗む、既にして月漸く東方の山を離れ、方向稍々辨ずべし、遂に虎視を過ぎ、平路に出で、再び馬を驅りて、午後十時過、漸く温井に達し、既に就眠の門を敲いて、宿を乞ひ、飢腹を醫して、眠に就きしは、十二時に垂んとする頃なりし、昨日來、不攝生の結果として、夜半に至り、腹部劇痛して、下痢之に伴ひ、大に

困却す蓋し、炎暑を同じ、悪水を飲用したるは、其主因ならん

朝鮮の旌表碑

朝鮮の旌表碑

八月二日、夙に起き出發の豫定なり、余の腹痛未だ止まず、厓に扶けて馬に上り、温井を發す、途、東萊府の郭外を過ぐ、府使代々の紀念碑……府使某公萬世不忘之碑と題するもの、市端に建立するを少からず、聞く、府使交任する毎に、士民一々、之を建つ、是れ眞に敬慕の誠意より出づるものにあらず、例の諂的標識たるに過ぎずと云ふ、但紀念碑を建つるは、當府のみに限るにあらず、余等の過ぎたる所にては、府市は勿論、村落に於ても、多く見る所なり、左れば、朝鮮古慣の一流行物なる乎、又府中所々に、イヤに彩色したる小堂、荆叢の裏にあるを見る、之れを廟と云ふ、當國にては、廟に護廟、厲廟、榮廟の別あり、蘇廟とは、諸神を祭るものにして、厲廟は、惡鬼を祭り、榮廟は、有徳の君子を祭る所なりと謂ふ、是れ只儀式的に止ると見へ、祠道草深くして、人の吊ふものなし、又孝子某碑、或は節婦某墳の如きも、往々、村市の端、叢深き所に於て見るとあり、所謂門閭に旌表するものならん、知らず韓の孝子節婦は、放尿累々の裏快く、瞑するや否

朝鮮の學校を觀る

朝鮮の學校を見る

是より順路、古館、草梁を過ぐ、草梁村に於て、朝鮮の學校を見る、庭上に藁を敷き、韓童十二三名、之に坐し、各々『小學』を我が習字狀大の字に書したるを持ち、教師句讀を教へ、或は暗誦するものあるを見たり、是れ韓人の所謂教育法なり、而して『小學』は實に彼等が理想上の徳義たるなり、之を過ぎれば、澗を隔て、遙に我釜山居留地の、塹壁の皎々たるを望む、數日來韓民の茅屋土壁を見みし後なるを以て、恰も大都會に入るの感あり、其愉快實に謂ふべからず、遂に、大池の旅亭に歸着し、一浴して葡萄酒を傾く、其味格別なりし、腹痛亦癒ゆ

再び一人の好伴侶を得たり

再び一人の好伴侶を得たり

農科大學助教授、津野慶太郎氏、同宿せりとして來訪せらる、氏は、我に、余等着韓以前に、當港に着し、牛疫調査の爲め、洛東江を遡りて、密陽地方に赴き、一昨日、歸港し、明晚出港の東京丸にて、元山津に向ふと云ふ、是に於て、其同志を得たるを喜び、同行を約す、午後五時、室田總領事、山座法學士、川上書記生來訪せらる

余等の一行に關する東亞貿易新聞の記事

余等の一行に
關する東亞貿
易新聞の記事

本日、當地發行の『東亞貿易新聞』に、雖林旭光と題し、我々一行に關する記事
を掲げて曰く、『帝國大學助教津野慶太郎君は、牛疫源因取調の爲め、密陽地
方に出張の所、一昨々日歸釜、又地理地質研究の爲め、來韓中の、第五高等中學
校教官、矢津昌永君、及兵庫縣中學校長、小森慶助君と、相伴ひ、來る三日、當港出
帆、海路元山へ出發の由なり』、と是れ我々の前途を悉くするものなり、故に茲に
借用す、夜來雨あり

滯釜中の來訪者

滯釜中の來訪
者

八月三日午前在宿當港の郵便電信局長、松村昇一氏、來訪せらる、午後、小學校
長、武光氏、及内田訓導來訪せらる、當國に關する種々の調査、及教育に關する
事項を調査して惠まる、蓋し、曾て委囑せし所なり

領事の饗應

領事の饗應

本夕、室田總領事より、余等三名、晚餐饗應の招待あり、午後七時、招きに應じて、
總領事館に至る、今茲に、總領事館に付記すべし、抑々、我總領事館は釜山港中
第一景勝の地を占め、龍頭山麓、緑松の間、聖屋、魏立し、旭旗、飄々たるもの、則ち
是なり、樓上より一望するとき、は、居留地の瓦屋、目睫の間、集り、釜山海は、新

朝鮮國衰退の
原因

月形を以て浸入し、金波、滄澗、大小の漁船、帆、繖、髮に浮び、絶影島、五六島は、恰も
泉池に浮べる、盆石の如し、又室内には、日本固有の諸美術品、及種々の裝飾品
を陳列し、頗る愉快なり、噫、席に移れば、主人、室田總領事、瀬川、山座、川上の諸氏、
座にあり、酒間種々有益の談あり、今其一二を擧ぐれば

朝鮮國衰退の原因

朝鮮國歩の衰退せる原因は種々之れあるべしと雖とも、其主なるもの二あ
り、一は官吏の貪婪にして、下民を壓制するとなり、當國は上下の別、非常に嚴
にして、兩班以上の人士は、下民を壓するを甚しく、之れが爲め、卑屈風をなし、
進取、改良の氣象なきのみか、地方官等の貪婪なる、治下の人民に、稍々富有の
聞へあるもの、部下の巡吏を使嚇して、強て罪を搦へ、若くは宛に陥れ、忽ち
之れを獄に下して、嚴刑に處す、只之を免るゝの法は、既に慣例あることなれ
ば、家人等は、家産を傾け、官吏に賄賂を贈るの一法のみ、斯の如くなるを以て、
人々勞力して、蓄積するの念あるとなし、其一は、征韓の役、我兵の蹂躪、掠奪に
よるなり、此役也、前後七年に亘り、我兵及明兵の、韓地に入りしもの、無慮五十
萬に過ぐ、到處、屠殺、燒夷、財貨、あれを悉く載せ歸れり、是に就き、一語あり、長曾

我部氏の、富民洞を引き拂ふや、凡う人民の一藝に能ある者ハ、皆載せ歸らんとす、是に於て、殘民等、哀願して曰く、公悉く我が能者を伴ひ歸る、吾々は只餓死あらんのみ、希くは吾々も伴ひ去れと、是を以て全村多く歸化せりと傳ふ、以て其一班を知るべしと、韓人は、獨り第二の原因を以て、貧弱の基とし、征韓に對しては、今に惡感を有すと云ふ

釜山居留地の由來

釜山居留地の由來

現今我日本人の居留地は、凡二百二十一年前釜山より移せしものにして、曉近に至りて、居留人益々多く、狹隘を感ずるに至りしを以て、先年朝鮮政府に照會して、海面凡二萬坪を、日本人の手を以て、埋立てたり、是れ今の、入江町西南の地にして、殆ど我日本の所有地に異ならず、其他の土地も、無期限借地にして、之に向ては年々、五十圓の借料を拂へりと云ふ

東京丸に乗組む

東京丸に乗組む

其他雜談に刻を移し、充分に快を覺へ、又獻酬に厭きしを以て、將に辭して歸らんとすれば、玄關には宿より迎ひの爲め來りて、東京丸の抜錨、既に迫れりと言ふ、驚て時辰を檢すれば、既に十一時を過ぐ、匆々宿に歸り行李を理めて、

東京丸に乗組む、東京丸は、郵船會社の所有にして、一千三百餘噸の大船あり、一ヶ月凡そ二回、薩摩丸と交代にて、元山を経て、浦鹽斯德に定期往復するものなり

余等の同船者

余等の同船者

同船者は、余等三名、及第一國立銀行員、西川氏、元山貿易商、防務委員、梶山新介、霞瀬忠次郎の兩氏なり、外に、他等の客は、日本人十三名、西洋人四名、露人三名、支那人七十一名、朝鮮人三十名とす、乗客は、毎回支那人を以て、最も多とす、故に支那人は、郵船會社第一の花客なりと云ふ、十二時抜錨す、此夜月明に、甲板に出づれば、涼風衣を吹き、亦夏熱のあるを知らず、且つ海上は、對馬海流に沿ふを以て、海波特に平穩なり

江原道沿海の形勢

江原道沿海の形勢

八月四日、朝八十四度（熊本八十一度）、曉起して甲板に出づれば、船既に江原道の沖を走る、有名なる鏡嶺の脈は、蜿蜒として南東に走り、南太白山に連る、多くは樹木なき秃山にして、間々矮樹の生ずるを見る、概ね花崗岩より成るが如し、山脈は相駢列したるものにして、著しく秀拔の峯なし、最高二千尺より千二三

關東八景

百尺までならん地圖によれば、高きは王城山、大關嶺等なり

關東八景

江原道は風景の勝あるを、全國の最たる由にて、濱海の山間には、侍中台、望洋亭、叢石亭等、總て八ヶの名勝ありて、之を關東八景と稱す、山脈は急に海に迫り、海底頗る深きが如く、島嶼稀に、潮汐又甚だしく、潮水清麗にして、名けて碧海と謂へり、大關嶺は、漢江の水源にして、其峽間は、舊來有名なる人參の産地なりしが、今は産額多からずと云ふ

海上の平穩

海上は至て平穩なり、船員の言に、冬期の航海は、風波あれども、夏期は常に波を揚げずと云ふ、是れ對馬海流に沿ふて、馳するを以てならん、然れども温暖なる海流の爲め、屢々濃霧海面を掩ふて、航路辨せず、遠笛の警聲を聞くも、頓なり、斯の如く平穩の航海なるを以て、人々愉快に海上の眺望を領し、毎食時には、必ず食堂に出で、食卓一人の欠席者を見ず

元山津に入港す

八月五日、朝八十二度（熊木八十一度）船既に咸鏡道の沖にあり、將に永興灣に入らん

海上の平穩

元山津に入港す

とす、而して、元山津（ウサンジン）も亦遠からず、是に於て、上陸の用意をなす、元山の港口には、島嶼散點して、水路數條に別れ、間々暗礁あり、弱ふ、島國軍艦は、暗礁の爲め沈没して、今は漸く烟突、檣頭の水面上より現はるゝを見るのみ、午前七時、元山港内に投錨す、港内水深くして、大船も陸に近づくるを得る良港なり、然れども、東京丸は、十二三町の所に止む、元山津は、後背に連岡を控へ、我居留地は、中央佳良の位地を占め、左は支那居留地にして、右は朝鮮人の茅屋の村なり、我居留地は、瓦屋白壁、凡そ一百戸、幾を駢べて并列せり

今は元山津の梅雨期なり

將に上陸せんとすれば、細雨霏々として至る、聞く、當地は、既に數日來の降雨にして、陰濕特に甚し、蓋し、此地の梅雨期なりと云ふ、故に細雨濛々として、密雲空を掩ふ、釜山にては、早魃四十日に及び、而して此地は、陰雨連日とは、塵かの所にて、異なるものかな、直に上陸、福島屋に投ず、朝飯を終りて、領事館を訪ふ

元山領事館を訪ふ

領事館は、居留地の北山に據りて在り、副領事、中川恒次郎氏、并に大木中村の

今は元山津の梅雨期なり

元山領事館を訪ふ

元山津の貿易

兩氏に面會し種々要件を委囑して、正午歸宿す、今中川領事の當港に關する談話一二件を記すべし

元山津の貿易

當港は、明治十二年八月の開港豫約により、我國の爲め開港したるものにして、今居留民七百名あり、支那人は三戸に過ぎず、貿易は、二十二年防穀令以來活潑ならず、是れ當港は、米穀輸出を主とすれば、第一に其害を被りたる所以なり、其他の輸出品は、牛皮、明太、海鼠、海草、煙草等なり、其内、牛皮は、日本に輸入すれども、其他は、概ね朝鮮の各港に輸入す、特に明太は、元山、北青近海に於て夥く捕獲する、一種の魚類にして、之を乾して、慶尙、全羅に送り、韓民の儀式的食膳には、必ず之を供ふるものなり

元山居留民の教育

教育は、本願寺僧侶の手により、共立小學校一個あり、我居留民の子弟を教育す、生徒六十名、學齡兒童は、大略就學すと云ふ

元山の位置及氣候

茲に元山津に就き記する所あるべし、當港の位置は、北緯三十七度二十八分

元山居留民の教育

三十秒にして、陸中及羽後の南端と、其緯度を同ふすれども、其氣候に至りては、寒暑の懸隔すると、釜山よりも一層甚し、是れ亞細亞内地に近づくによるなり、左に其寒暖の度を示すべし

明治十九年	全	二十年	全	二十一年	全	二十二年	
一月	零下十四度	二月	零下四度	三月	零下十度	四月	零下九度
五月	三十四度七	六月	三十四度	七月	三十四度六	八月	三十四度八

斯の如くなるを以て、咸鏡、江原兩道の沿岸海面へ、冬期氷結し、港を鎖すに至る

元山津居留地の風致

居留地内には、郵船會社、郵便局、警察署、第一及第百二銀行支店及公園地の設けあり、公園地は、租界の南部にあり、園中に、雲母片岩露山の巉岩ありて、頗る風致に富む、岩頂に、天照大神を祭る、園内には、高麗松多く、韓人は之を柏と云ふ、楓類及楊等之に次で多し、楓へ其類多く、葉の大なるものは、羽扇を欺くものあり、且つ樹幹も數抱に及ぶものあり

元山津居留地の風致

白頭山は火山なり

地質は概ね結晶岩に屬し、雲母片岩最も多く、廻綠岩、石灰岩等之に次ぐ、其走向は北西より南東に走るを見る、而して北部、滿州嶺に至るに従ひ、漸次高度を増し、遂に白頭山の高峰となる、白頭山は、鴨綠、豆滿、松花三大江の水源にして、英人ヨングハスバンド氏等の探險によれば、四圍尖峰を以て繞らし、其中心には、周回四里三十町の火口湖ありて、頂上は、海拔七千五百尺ありと云ふ、其四近は、一般に火山岩にして、岩中に玄武岩あり、故に白頭山は、全く消火山なりと云へり

白頭山は火山なり

歴史上に於ける咸鏡道

咸鏡道は、朝鮮最北の一道にして、元、良哈(今の魯頤)に境し、道中の咸興府ハ、現王室なる李氏基業の地にして、朝鮮にありては、人質、慄悍を以て、聞ゆ、今の元山津は、古の永興にして、壬辰の役、清正の安城(安)より、來り攻むるや、二王子既に逃れて、鏡城にありと聞き、鍋島、相良の兩將を留めて、永興を守らしめ、自ら輕兵を卒おて、鏡城に至り、韓克鉞と、海汀倉に戦ひ、大霧に乗じ、掩撃して、克鉞を擒にし、進んで鏡城に至れば、二王子既に、會寧府に逃れしを以て、馳せて會寧府

歴史上に於ける咸鏡道

瀛船發航の延期

に至り、遂に二王子を擒すと傳ふる所、歴々本道の中にあり

瀛船發航の延期

此夜、瀛船の出港は、明後七日午前六時に延期せしを報ず、蓋し降雨暫時も止まず、且つ風伯之に乗じて、船中の荷物、陸揚げを得ざるを以てなり、併し之れが爲め、氣温大に降り、午後二時に於て、七十八度に過ぎざりし

秋冷運に來る

八月六日、曉來雨脚未だ止まず、朝七時に於て、七十四度に過ぎず、少しく晴料を覺へ、遂に秋冷の襲ひ來りし之感あり、街上の寂寥特に甚し、津野氏は、當港及此近傍に於て、調査の廉あるを以て、浦鹽行を止め、余等の歸途まで、當港に滞在するに決し、第百二銀行支店に、轉寓す

朝鮮貿易に對する紳商の談話

當港まで同船したる、本港紳商、樞山新介氏來訪せらる、氏は防殺令、被害運動委員にして、又被害の最も大なるものなり、今般、償還金一件に付、我政府に請ふ所ありて、上京せりと云ふ、氏の言ふ、防殺令によりて、我商人の損害ハ意外に夥しく、直接に三十二萬八千圓なりと算定す、若し間接の損害を加ふると

朝鮮貿易に對する紳商の談話

秋冷運に來る

きは蓋し五十萬圓に及ぶべしとなり、氏は久しく朝鮮貿易商たりし、經檢よ
 りして曰く、日本人は最も朝鮮貿易に適當せり、何となれを、我國民の性質と
 して、歐米に向はんよりは、先づ寧ろ朝鮮貿易に従事し、貿易の懸引を悉知す
 べし、特に厘に一輩水を隔つる所なれば、假令郷土に戀々たる、我邦人にて
 ヨモ此地に渡來するとは、格別難しとせざるべし、又朝鮮によりて、我國益を
 なすと、實に夥し、現に我國民の駐在するものにて、常に壹萬人に下らず
 而して、之れが資本金は、五百萬乃至八百萬圓にして、之れに對する收得少な
 からず、且つ日本漁民の朝鮮沿海の漁獵に従事するもの、又一萬人而して其
 漁額蓋し一百五十萬圓に軼ぐべし、彼れ是れを合すれば、朝鮮の我國を利す
 ると、少なからざるを知るべし、外交上、豈に之を度外視すべけんや、云々、其他
 雜談刻を移し、當港貿易に關する、調査の材料書類を貸與せらる

元山街頭の所見

朝來宿にありて、樓上より望むに、釜山と同じく、韓人の行商少からず、皆な日
 本語の觸れ聲を放てども、殆ど其意を解する能はず、釜山とは觸れ様も異な
 り、聞く朝鮮にては、慶尙、全羅邊と、此の咸鏡とは、言語大に異なりと、余等外人

元山街頭の所見

の、聞く所に於ても、亦稍々異なるを覺ゆ、例へは釜山にては、船をべいと稱し、
 元山にては、べいと云ふが如く、總て去聲なるが如し、此日細雨終日止まず、街
 上行人稀に、時々白衣の韓人、帽上に異形の油紙製の笠を戴き、來往するの状は、
 古風とや謂はん、閑雅とや謂はん、奈、良朝以前の、風俗の忍ばれて、イト面白し

元山津を出港す

東京丸は、明早朝、烏港に向け、出帆の豫定なるを以て、此晚本船に乗組むとに
 決し、午後五時、晩食を了り、小森氏と共に、津野氏の寓所なる百二銀行に至る、
 既にして、中川副領事來訪せらる、領事は、余等の寓所、福島屋を訪はれたれど
 も、既に立後なりしと云ふ、是に於て、行李を津野氏の寓所に掩し、再會を約
 して相別れ、途、梶山氏を訪ふ、氏は船中用として、麥酒數罎を惠まる、直に本船
 に乗組む、時午後八時なり、此夜一天既に晴れ、星斗爛々、夜涼頗る快なり

鐵嶺の曉望

八月七日、朝七十八度(八十度本)、曉起して、曠望を取れば、右舷は茫々として、際涯
 を見ざる、日本海にして、水天一碧、波濤かず、左舷は、近く、咸鏡の沿岸を望む、後
 背を擁するは、屏の如き、鉄嶺にして、翠峰、青巒の裏、聖壁の峻々たるは、是れ元

鐵嶺の曉望

元山津を出港す

山津なり、眞に是れ一幅の活山水に異ならず、是れまで見たる朝鮮の山峯は、禿山にして、或は岩骨露れ、頗る殺風景なりしが、元山近傍は、總て緑を以て掩はれ、間々森林あるを見る、是れ全く地質の異なるによるべし、然れども、多く峻嶮にして、傾度二十七八度より、或は四十度にも及ぶ所あるべし、咸鏡の山は、一見其相を異にし、寒帯に類するを、知り得べし

兀良哈を望み藤肥州の古事を懐ふ

彼れ是れと、視察の中、正六時に及び、船は運轉を始めたなり、本船ハ速力十哩餘、浦鹽までは三百二十三哩、凡そ三十時間を以て達すと云ふ、當港より霧に沈没したる魯艦の水兵十一名、及士官一名、東京丸に乗組み、前十一時、海面霧生ず、數々瀛笛を吹いて進む、既にして霧亦稀る、鏡城并に兀良哈地方の群峯は起伏して、怒濤の如し、是れ文祿の役、藤肥州の北征して、爰に抵り、遙に岳を望み、懷郷の情に、思はず士卒をして襟を濡さしめし、所なり、抑々當地は釜山を距る四千七百韓里、氣候寒烈、禽獸風土亦其趣を異にし、英雄も爰に至りて、豈に一滴の涙なからんや、余等今は瀛船に眠り坐から之を見、轉た今昔の情に堪へざりしなり

兀良哈を望み藤肥州の古事を懐ふ

鹿島何時の間にか魯領と化す

午後、豆満江、或は圖們江に作る吐口の邊を過ぐ、豆満江の海口は、別れて兩派となり、鹿島と稱する三稜洲を抱いて、海に入る、此島は、元と韓領なりしが、明治二十四年の頃、魯西亞は之を占領したりとて、一時世界の注意を惹き、世間の談柄となりしものなり、今聞く所によれば、既に純然たる魯領に歸し了れりと云ふ

魯國南下の策歴々見るべし

強國と弱國と、境界相密接するの結果は、尙ほ之れに止まらず、他に種々の現象を認め得べし、朝鮮咸鏡道北部と魯領との間には、兩國交渉事件少なからず、元來魯國が朝鮮の北境より、漸次に手を着けて、南下せんとするは、蔽ふべからざる事實にして、其韓北より南侵する第一の策略として、圖們江涯の韓民を自國に懐け、遂に魯化せしむる策の實地に行はれ、始めしは、今より二十八年前、朝鮮の大饑饉の時にあり、當時魯領接近の韓民は、生活の道に就かんを求め、争ふて國境を踰へて、西伯利に入り込みしが、其時は、恰も魯國が、滿州沿岸地方を收め、専ら開墾の策を盡するの際なりしかば、彼等を魯化せし

鹿島何時の間にか魯領と化す

魯國南下の策歴々見るべし

もる政策を、實行せしむるは、此時にありとし、ユルサコフ、ブスロフカ近傍、肥沃の地を興へて、農具、牛馬等をも貸與し、以て生業を得せしめたり、此に於て、饑餓の韓民等へ、相率おて、魯領に走り、爲めに咸鏡北部は、著しく人烟を減せり、抑々、咸鏡道の北部は、韓の極北境にして、氣候寒烈、地味礪確にして、生計には最も困難なるより、一たび生活に易き地を得ては、再び歸るを忘れ、加ふるに、北境の韓民等は、天然風土の然らしむる所、人質慄悍にして、魯民に似たる所より、魯領に投じたる韓民等は、魯民と厚く親和し、現今、朝鮮接近にある一萬有餘の韓民等へ、大概、殆ど魯國に歸化せしもの有様なり、今日、余等の浦鹽四近に於て、見る所によるも、洋裝斷髮にして、帽を戴き、其容貌の酷だ、日本人に似たる人士の、徘徊するを見て、怪て之を叩けば、是れ、則韓人の魯國に歸化したる者なりと云ふ。

圖南策に對する朝鮮の措置

圖南策に對する朝鮮の措置

而して、魯國の政策は、尙ほ之に止まらず、他の一方には、魯人が種々の物品を携へて、毎年、朝鮮北境に入りて、頻りに韓民と通商し、次第に、韓民の歡心を收め來れり、斯くて、魯國南下の策は、着々歩を進めて、怠らず、朝鮮政府に於ては、

疾くより此事の、大害なるを憂ひ、北方の地方官には、武勇の人物を撰任し、國民の魯領に走るものを防制し、嚴罰を科せり、既に此程のとなりき、魯領に在りし、十餘人の者、歸國するや、地方官は、直に之を虐殺したるが、中一人、雁に遷れて魯領に走り、魯國地方官に訴へたるに、朝鮮地方官の所置は、大に魯國南下の策に、防害あるを以て、直に京城の魯國公使館に移牒し、魯國公使、ドミトレフスキー氏は、將に、外務督辦に向つて、嚴重の談判に及ぶと云ふ、豈ふ奇象ならずや。

魯西亞水兵の舞蹈

魯西亞水兵の舞蹈

晚餐後、露國の水兵等、甲板上に於て、樂器を弄し、唱歌の連唱を始め、其意を解せずと雖ども、始め其兩三曲を、謹唱するを見れば、想ふに、國帝の萬歳を祝し、國家の隆盛を祈るものならん、嗚呼、彼等が忠君愛國の赤心を、涵養する素ありと謂へし、唱歌了れば、各々初めて笑顔を開て、舞蹈を始め、其藝の巧拙は、全く躰と足とにあるが如し、而して中にも、重なるは、足の踏み方なり、兩手は背後に組み、眼は遠所に着け、胸郭腹部は、前方に突出して、足踏みす、一人了れば、直に一人之に代り、斯の如きもの、數次にして、四人舞蹈となる、内に日本

婦人(醜業婦ならん)一人を加ふ、一高一低其曲頗る妙なり、之を觀る爲め、船客盡く集る、英人あり、米人あり、魯人あり、支那人あり、韓人あり、其容貌より、体格服裝に至るまで、各々異なり、之を見る方却て奇觀なり、而して最も余の感を呼びしものは、日本人の矮小なるをなり、何れの國人に比するも、概して短身なり、斯の如くして止まざれば、遂に世界矮人の名を博するに至らん、知らず大陸の山水、人跡に影響するや、否や、日暮れ踏舞亦止む、即ち室に入り麥酒を傾け、日本海中、華胥の郷に遊ぶ

金角灣頭兵備嚴なり

八月八日、朝七十七度(熊本七十七度)甲板の上に立てば、北西の風髪を吹いて肌の冷なるを覺へ、人をして秋の至るかと思はしむ、船は魯領彼得大帝灣内を走る、海濱に逆斜する阜岡は、沿海洲の海岸を走る、錫赫特嶺の支脈なり、丘陵は、皆岩骨を露はし、地層一々辨ずべし、多くは太古紀岩なるが如し、總て樹木なく、牧草を生ずるのみ、船進んで第二の灣に入らんとす、灣は金角灣(Goltsyn Bay)と稱す、其灣入せる狀の獸角に似たるを以て此名あり(或云ふ土耳其の金角港による)灣口に一島あり、カザチウイツラ島と名く、日本人は之を露西亞島と曰ふ、此の海峡を、ボズフォル海

金角灣頭兵備嚴なり

峽と稱す、露西亞島の中には、種々に彩色せる巨大の兵營、續々駢列す、又其綠林中に、例へば白鷺の群集せるが如きものあり、是れ陸兵の野營を張る、天幕ありと云ふ、灣内處々の岬角、島嶼等は、總て砲台駢列し、其要害、非常に堅固なるを見る、此港附近の砲台は、總て二十一個の多きあり、特に露西亞島の兵備の嚴なるは、之を小冕城島(Kronshlot)とも稱す、彼れが武威を以て、東洋に臨むの底意、知るを得べし

廢氣樓の一大市街

金角の灣内を、次第に進めば、忽ち前面綠色の丘阜に據りて、建てる、一大市街の現はれたるは、是れ外ならず、浦鹽斯德是なり、其外觀頗る莊麗にして、或は赤色の高塔、陰々として聳ゆるもの、或は綠色の圓蓋、亭々たるもの、或は灰色の連屋、或は黄色の巨家、或は橙黄、或は黝黑等、總て様々の彩色を施せる、一大阜頭へ、既に眼前に横はれり、而して此等の家屋は、後を擁する阜岡により、層々相駢ぶを以て、一層の美觀なり、之を貫く街路も、亦皆斜面に沿ふて通じ、行人馳車、絡繹たるもの、悉く辨ずべし、實に旅客の眼界を一新し、身は歐洲の市都、ふ在るの想ひあらしむ、東京丸は、陸を距る七八町の所に至り投錨す

廢氣樓の一大市街

硝煙浦鹽港を掩ふ

船の既に進行を止むるや、否灣、内巨砲の聲、一時に起る、諦視すれば、右舷に當り、魯國東洋艦隊の軍艦數艘碇泊し、皆滿艦飾をなせり、砲聲は即ち、此艦隊より起れるなり、聞く所によれば、東京丸が元山津より、霧に沈没したる、魯艦の殘兵、并に士官を乗せ、今無事に歸港したるを以て、之に對する祝砲なりと、一時ハ砲聲數艦より起り、硝煙深く滿港を鎖して、頗る勇壯の觀ありし。

浦鹽に於ける種々の風躰

祝砲止んで、東京丸が、高く漁笛を放つや、赤色の猪牙舟は、支那人に操られて、無數本船の下ふ集り來り、争ふて其己れの舟に乘らんとを乞ふ有様も、亦一の奇觀なり、本港の短艇は、水面より現はるゝ部分は、總て赤色に塗らしむるの規定ありと、故に猪牙舟の集りを見れば、朽葉の疾風に逢ふて、水面に浮ぶが如し、切りに乗客は上陸を待てども、未だ税關吏、警察官、及醫員の検査了らざるを以て、上陸を得ず、其間に當港在留の日本人、魯西亞人、朝鮮人、及各國人等は、各々其同胞等の來着を迎へんが爲め、續々本船に入り來るを見るに、其容貌、其服裝、其舉動等、一々異なり、日本人は、様々なる洋服を着し、魯人は、多く

浦鹽に於ける種々の風躰

蠻子及其市場

蠻子及其市場

白色の軍帽を戴き、支那人は、例の通りなり、既にして、魯國警察官の入り來るを視るに、白色の軍帽、及軍服に、白銅の鈕を着け、軍刀は革を以て肩より之を釣り、服を掩ふまでの長靴を穿つ、税關吏も、亦た軍人の如し、而して、其検査の法には、甚だ緩嚴の差あり、支那朝鮮等の東洋人等は、一々嚴に其旅券を檢し、其健康を診し、且つ其荷物は、悉く行李を解いて、之を檢し、後始めて上陸を許すと雖ども、日本人、及西洋人等は、特別無検査なり、我日本人を重ずるや知るべし、(昨し時によりて、緩嚴ありと云ふ)

検査了れば、來迎者なる、扶桑舍主人、川邊虎氏(水戸)に誘はれ、彼の赤猪牙に乗り、上陸すれば、波止場には、支那人、朝鮮人、充滿し、客の手荷物を持たせんとを請ひ、客に尾して來る、一種の臭氣鼻を撲つ、之を過ぎれば、マンザの、パサルあり、即ち支那人の市場なり、當港にては、支那人を蠻子と稱す、蠻子とは、漂流民或ハ脱籍者の意にして、支那貧民の、本國を脱したる者を指したりしが、今は支那人の總稱となれりと、其市場は、多くは青物店にして、間々雜貨店あり、頗る雜沓なりし。

西伯利大鐵道
線路を踏む

西伯利大鐵道線路を踏む

市場の左側は是れ余輩が多年夢想の間に來往したる彼の有名なる西伯利大鐵道線路の踏切り道なり、多年之を口にし、又之を筆にし、而して今實際此鐵道線を踏み、蒸氣車の黒烟を吐きつゝ、直に西を指して馳するを見るに、及んでは實に一層の感ありし、線路の前途を望めば、坦々として、黒龍灣に沿ふて走れり、是れぞ他日東洋、否寧ろ世界に一大風化を興ふる、大有力機なり、聞く現今愛を距る、百二十露里なるニコリスク府まで、軌道の敷設を終り、來る九月下旬頃に至れば、通常客車の往復を始むと云ふ、但し荷積車は鐵道用材を載せて往復するを見る、此用材は遠くオデッサ港より、蒸船を以て回漕するものなりとぞ、此の烏蘇里線の竣工して、ペートルスブルグ線と相連絡するの期限ハ、屢々變更し、又種々の説あれども、本年より向ハ、八年、即ち千九百年を以て竣工期と決定したる由、左れば世紀の改まると共に、第二十世紀は、世界特に東洋の氣運大に革新するの期ならんか。

烏港は總て建築時代なり

彼の廢氣樓的、家屋の駢列せる間を過ぎ、正午、扶桑舎に着す、船中より市街を

烏港は總て建築時代なり

日本旅店の繁昌

一望したる所にては、街衢頓整し、肆店櫛比するが如くなりしが、今街路を通過したる所にては、家屋は未だ悉く、建ち揃ふに至らず、或は石を運ぶもの、或は煉瓦を積むもの等にして、全く大工小屋に入るの感あり、或人は、浦鹽は、火事場の如しと評せり、兎に角、當港は總ての事、建築時代なり、市街の設計規模は、實に驚くべき大なるものにして、西北の延長七露里に及ぶ、今三五年を出でずして、東洋第一の大阜頭となるを疑はざる所なり

日本旅店の繁昌

扶桑舎は、日本旅店の唯一のものにして、日本人の當港に來るものは、必ず投宿するを以て、空室なく、拾五六疊程の一室に、大食卓一基、寢臺八箇を列せり、宿料は一泊八十哥（我六十四錢なり）とす、然れども、魯人の旅店は、一泊二留五十哥（我二）を要すと云ふ、晝飯の上、我帝國貿易事務館に至り、貿易事務官、二橋謙氏、并に野村氏に面會し、種々當地の景況を質問す、今茲に、浦鹽斯德港に就き、貿易事務館に於て、聞く所、及余の聞見せし所等を、概括して左に記述すべし

浦鹽管理の來歴

浦鹽斯德は、亞細亞魯西亞、沿海州の最南に位する、一府にして、ムライウィヨフ、

浦鹽管理の來

アムールスキ半島(占略の名)の南端に位し、北緯四十三度七分、東經百三十一度五十四分にあり、東ハ烏蘇里灣にして、西ハ即ち黒龍灣なり、抑々當港の始めて、魯領に歸せし來歴を原ぬるに、千八百五十年五月、露國海軍少佐、チヘエリスコイ、始めて此地に上陸して、警旗を立て、魯領と稱し、此地をウラヂラストク、**БАМБОТСКЕ**と名けたり、即ち露語の管理と東部との字より成る、然し此時までは、唯擅に露領と稱したるまでにして、公法上、露領と認むべき地には、あらざりし、千八百六十年、始めて、陸兵四十名を送りて上陸せしめ、此地を占據し、此年八月を以て、清國と條約を訂結したり、此條約によれば、烏蘇里江及松花江を以て、國界となし、東ハ露國に屬し、西ハ清國に屬す、又其以南ハ、興凱湖を越へて、直に白令河に至り、白令河口より、山嶺に沿ひ、**ホブ**河河口に至り、再び、**ホブ**河より、**理春河**と日本海の間に跨る、山嶺に從ひ、**圖們**江に至る、其東を露領とし、西を清領と定む(卷首の地圖參看)

浦鹽港の進歩

以上の條約によりて、始めて公然魯領に歸せり、於是、兵營と寺院一字を建つ、其年終りには、六百の人口を有する一村なりし、一千八百六十二年、當港を以

浦鹽港の進歩

て軍港と定め、併せて自由港とせり、同六十四年、此地に彼得大帝灣内、諸港の總督を置く、此年市會を設け、市長を撰めり、同六十五年、西伯利小艦隊を以て、運送業を創め、本國より第一回、殖民を送れり、踰へて、千八百七十二年、海軍鎮を、ニコライスク府より、當港に轉置せし以來、人口非常に増加し、次て、七十六年、市制施行後は、益々盛大となり、同八十五年にハ、兵員を合せて、人口一萬〇五百に達し、現今に至りては、大約四萬二千内外の人口あり、其内譯左の如し(但し人口は精算し難しと云)

- 露西亞人 一萬六千五百人
- 支那人 二萬二千人
- 朝鮮人 二千六百人
- 日本人 七百五十人
- 獨逸人 七十二人
- 英吉利人 十一人
- 各國人 十人
- 計四萬千九百四十三人

浦鹽港の氣候

氣候の不順
緯度は、羅馬、ウエニス、ゼ子ツア、ミラン等と、位置を同ふすれども、其氣候は甚
た不順なり、是れ沿海州は、黒潮の影響を受けず、却て大陸に沿ふて、北より南
に流るゝ、寒流の爲めに、寒涼ならん、而して此寒流は、尙ほ此に止まらず、左の
力を現はす、夏は温暖なる南及東南の風吹き、而して此温暖多濕なる大氣
は、寒流の上を渡りて、其冷す所となり、水蒸氣は沈澱して、雨又は霧となる、是
を以て、雨霧分外に夥しく、夏期は極濕と稱すべし、此濕氣は、家屋内の最も乾
燥なる室と雖ども、黴菌を生ずるに足る、又木材等は膨脹し、金屬は酸化す、烟
草は濕ふて味を失ひ、飲用水は汚濁す、偶々雨霧なきの日は、暑氣強く氣息は
爲めに困難を感ず、陰に於ても、寒暖計九十九度半(華氏)に達す、或は以上に昇る
とあり、時としては夜に入りて、尙ほ涼を覺へざるとあり、只秋期は、年中の最

浦鹽港の氣候

氣候の不順

氣候の不順
緯度は、羅馬、ウエニス、ゼ子ツア、ミラン等と、位置を同ふすれども、其氣候は甚
た不順なり、是れ沿海州は、黒潮の影響を受けず、却て大陸に沿ふて、北より南
に流るゝ、寒流の爲めに、寒涼ならん、而して此寒流は、尙ほ此に止まらず、左の
力を現はす、夏は温暖なる南及東南の風吹き、而して此温暖多濕なる大氣
は、寒流の上を渡りて、其冷す所となり、水蒸氣は沈澱して、雨又は霧となる、是
を以て、雨霧分外に夥しく、夏期は極濕と稱すべし、此濕氣は、家屋内の最も乾
燥なる室と雖ども、黴菌を生ずるに足る、又木材等は膨脹し、金屬は酸化す、烟
草は濕ふて味を失ひ、飲用水は汚濁す、偶々雨霧なきの日は、暑氣強く氣息は
爲めに困難を感ず、陰に於ても、寒暖計九十九度半(華氏)に達す、或は以上に昇る
とあり、時としては夜に入りて、尙ほ涼を覺へざるとあり、只秋期は、年中の最

冬期の氣候及其烈寒

も愉快なる時期にして、天氣晴朗、寒暖身に適するの好時節とす

冬期の氣候及其烈寒

冬期に至れば、寒氣強き北及北西の風吹き、天氣は片雲を留めざると多く、大
氣の乾燥は、此節を極度とす、烟草は細末となりて、木材は収縮す、家具は概ね
罅隙を生ず、降雪は至て少く、然れども吹雪の時は、雪を道路の一方に吹き集
め、雪壘を築くとあり、方言ブルガ(雪嵐)と稱する、冬期の暴風は、十月後に至
れば、早く既ふ至り、十二月及一月を以て最も威を逞ふす、寒氣は、華氣零下二
十八度七五(列氏零下七度)の烈寒に沈降するとあり

風力には定時あり

風力には定時あり
風力は、四時共定時ありて、朝は靜穩にして、午前十時十一時の間に至りて風
を生じ、正午に近づくに隨ひ、勢力強く、三四時の頃最強に達し、夕景の頃漸く
衰へ、遂に再び靜穩となる

浦鹽氣候の兩極端

浦鹽氣候の兩極端
之を要するに、浦鹽の氣候は、兩極端にして、無比の乾燥・凍涼なる烈風を
有する、無雪嚴寒の冬と、温暖なる南風より生ずる雨霧・無上の濕潤を以

浦鹽氣候の兩極端

風力には定時あり

とする、酷暑とを兼ねる者なり、氣候既に斯の如し、故に之に附隨する現象は、即ち冬は木材乾縮し、夏は温濕の爲め膨脹す、故に床板壁障、天井等、冬は皆間隙を生じ、夏に及べは張満す、且つ木材板皆罅裂して間隙を生じ、蟻蝨ハ過度の乾燥の爲め、粘着力を失ひて離脱す、木造の家は裂け、樂器は破損するに至る、烟草ハ、冬は細末となり、夏は搾れは水を生ぜんとす、故に夏室内を乾かさんとすれを、已むを得ず、火を焚かざるべからず、千八百八十五年中の天氣は、晴天百四十四日、其他の二百二十一日は雪嵐、後雨、雪、濕風等なり云々、以上は浦鹽記中の一節にして、此日(八月)午後二時、余が携ふる所の準器寒暖計は、正しく華氏九十四度を示せり、而して熊本の同時觀測によれば九十一度なり、事務官の談に、昨日の如きは、頗る冷氣にして、或は外套を用ひたり、且つ昨日は濕氣甚しく、現に此室内にストーブを燒けりと云へり、此地氣候の不順なる推知すべし

武斷政治の餘波殺伐殘忍風をなす

開港場に於ける、風俗の輕跳浮薄なるは、何れの國に於ても、是れ免れざる所なるも、而も浦鹽は、之に加ふるに、又一種の惡風あり、當港は軍港にして、百事

武斷政治の餘波殺伐殘忍風をなす

武斷を以て政略とするが故に、他の人民も自ら殺伐となり、加るに其殖民を計るが爲めに、本國の罪囚を送り來りて之を役し、刑期滿つれば之を放ちて、自由民となすが故に、殘忍酷薄の者尠ならず、殆ど徳義の觀念を有せざるかと疑はる、魯西亞人種……彼の顔貌に、一種の殘忍を帶ぶ、其下等民の如きは、蓬髮、鷄衣、紅鬚深く、而を掩ふて、行人を視睨するの狀は、一見したる所一と瘡あり、そいなり、是を以て強盜多く、而して人を却迫して、奪ふが如き緩手段をなさず、寧ろ初より命を奪ふて後、其財を掠むるを常とす、又猥褻風をなし、有夫の婦にして、他に好情を通ずるが如き、珍しからずと云ふ、此點より觀れば、我醜業婦も、當地に於てハ、甚しき耻辱にもあらざるが如し

美術優雅の風に乏し

當港に於て見る魯人は、豫想よりも身の丈高からず、多くは純白の服に、白の軍帽を被もれり、商人小使に至るまで、軍帽は一般の風なるが如し、男子にして日傘を翳すもの絶てなく、小爾位は傘を用わずと、下等民は粗衣を着け、往々外套を着するものあり、通じて「流行」又は「ヤレ」の如きとは、後日の談なるが如し、一般に美術思想に乏しく、庭園の如きものを有するは全く之れなく、

美術優雅の風に乏し

稀に窓間に盆栽を置くを見るのみ、婦人は多く更紗の袷紗を以て、頭を覆ふて肩に垂れ、上等社會の妻女にあらざれば、帽を用ゆるものなし、故に日本人は直に魯西亞婦人を評して、達磨と綽號せり、蓋し其狀の似たるを以てなり、又婦人の服装は、別に西洋婦人服と異ならざれども、總て華美なる色を好み、紅色、茜色、紫色最も多く、老婦人にして、深紅の服を着するもの少からず、(地質は更紗)其他一般の嗜好、悉く幼稚にして、幽婉高雅を愛する等、のと絶へて之れなく、其開國の未だ幼稚なると共に、其思想も亦單純なるを免れず、美術國民の眼に映ずる所、總て殺風景なる兒戯なるのみ。

浦鹽の名物達磨と赤鬼

市中には固より人力車なく、只縦横に疾驅するものは、馬車なり、其御者を見るに、赤服を着し、異形の黒塗帽を頂き、鬚髯蓬々として、恰も冥府の赤鬼に類す、故に日本人間、忽ち諺をなして曰く、「浦鹽の名物は、達磨と赤鬼なり」と、蓋し婦人及御者の異様なるを謂ふなり。

蠻子の境涯

下等婦人は、跣足の者あり、小兒の如きは多く跣足を常とす、當港に於て、社會

浦鹽の名物達磨と赤鬼

蠻子の境涯

の上流を占むる人士は、多く軍人にして、其他の輩には、紳士と稱すべきもの少し、餘は兵卒、工夫を以て多數を占めたり、市の人口の多分を占むるものは、支那人なれども、彼の蠻子と稱する程の、脱籍若くは逃亡等の、下等賤民にして、皆賤業に従事し、中には賤業をさへ得ずして、塵溜杯を搜索する公子あり、支那人の當港に出稼ぎする者、年一年に多く、特に本年は、解氷後既に一萬二千人渡來せり、尤も本年の如く、多く渡來せしは、曾て之れなき所にして、是れ全く、山東省地方の饑饉によるなりと云ふ、故に到る處支那人を見ざるはなし、若し彼等について、少しく氣概あらしめば、烏港は言はず、語らず、己に支那人の有とならん、何となれば、全市の人口過半は、支那人の占むる所にして、魯人の如きは、殆ど其半を占むるに過ぎざればなり。

商業の景况并に輸出入

日本人の在留者、七百五十人の中、商店を有するは十二戸にして、第一等は杉浦商店なり、外に加藤、木村、江村、松尾、小林の各商店あり、其他の六個は、彼の醜業店なり、杉浦以下の各商店は、何れも日本雜貨を販ぐ店なり、事務官の紹介により、杉浦商店を見舞ひしが、拾萬圓内外の商賣なるべく、銀坐通りに於て

商業の景况并に輸出入

も恐らく稀に見掛べき程のものなり、主人に面會して種々商業上の事を質問し、去りて木村商店を見舞ひたり、當港の貿易は概ね在留人の需用に供する、輸入品のみにして輸出は甚だ少し、輸入額は次第に増加し、明治二十二年には五百八十萬留なりしが、明治廿五年度にては八百七十五萬留に達し、本年は既に一千萬留を超過すべしとなり、貿易上最も勢力あるは獨逸、アルペルス商會にして輸入全額の三分の一を占む、余は種々買物の爲め該店に到り見しに、雜貨店及酒店より成り、樓上の如きは實に巨萬の貨物を藏せり、當港の輸出品は山人參、魚類、昆布、牛骨、更紗等なり、酒類、煙草、引火奴、砂糖の四品は、當港の保護品にして、輸入税非常に高きを以て、頗る高價なり、故に入港の際、乗客に使用殘餘の酒、煙草等あれば、放棄するを忘るべからず

皇太子歡迎門

市中處々を事務官より附せられたる案内者の誘導によりて散歩すれば、道路も家屋も多く半成就とも謂ふべく、煉瓦を運ぶ朝鮮人・石を割る支那人等、充斥たり、是等の建築にして、盡く成就せば、烏港の繁榮甚しからん、棧橋通り、建築の異様なる大門あり、是れ明治二十四年五月ニコラス皇太子殿下

皇太子歡迎門

來着の時、歡迎の爲め、市民の設けたるものにして、尼古拉斯門と名く、煉瓦を以て積み上げたる、四脚より成り、上に綠色に彩どりたる尖塔を置き、高く天を衝く、其四面は相替らず、塗るに種々の彩色を以てす、例へば、甌物の龍宮を見るに異ならず

市中の重なる建築物

市街の後部に岡あり、上に日照計を置く、登臨すれば全市一目の下にあり、市内は行政上四區に分ち、警察長をして統轄せしむ、東部に造船場、各士官の邸宅あり、西部に停車場(建築中)、花街あり、中央の建築物の重なるは、府廳、兵營、海軍俱樂部、海陸軍病院、警察署、知事官邸、教會堂等なり、近來工業も益々進歩し、煉瓦製造場、釀酒會社、麥酒製造場、及皮革製造場の如きは、五個所に及べり

艦隊及び其兵備

當港は西伯利の門口にして、魯國の軍港なり、海軍鎮を置き、西伯利艦隊、東洋分遣艦隊、義勇艦隊を備ふ、明治廿四年の調査に、西伯利艦隊十二隻、東洋分遣艦隊五隻あり、何れも港の東部に碇泊す、義勇艦隊は、千八百七十八年、有志の義捐金を募り、一艦隊を編成したるものにして、十隻より成り、港の西部に碇

市中の重なる建築物

艦隊及び其兵備

浦鹽を貿易港とするの準備

泊す左れば當港に碇繋する軍艦は、總て二十七隻なり、嗚呼二十一個の砲臺二十七隻の軍艦何の用をかなす彼れが絶東に力を用ゆる亦重い哉

浦鹽を貿易港とするの準備

近來烏港を以て其一部を貿易港となすの議漸く熟し、政府は委員及び技師を派遣して其位地を調査せしめ、愈々然るべき位置を撰定して復命したれば、露政府は貿易港と定むるとの旨公布したりとの電報到達せりと、余が滯烏中風評せり、露政府は之れ等の準備の爲め、セウエリヨウ溼船會社を保護し、本社を當港に置き、支社を我長崎、神戸及朝鮮各港、支那各港に置き、運送溼船を増加せしめ、航路一漚に付三留の保護を與へ、以て各國商船と大に競争を試みんとせり、現に我郵船會社の如きは、之れが爲め影響し、歸航は下等運賃を低減し、(長崎まで九回を六回に)て乗客を争へり、將來此航路に關するものは、須らく用意すべきなり

地質及家畜

地質及家畜

此邊の地質は、其岩骨は太古紀の砂岩、粘板岩等を以て組織し、其表面は、是等の霉爛物より成れる土壤にして、地味頗る肥沃なり、牧草到る處に繁茂し、牛

憐むべし支那人朝鮮人

馬豕を放飼せるを見る、馬は其体格皆壯健にして、性質從順なり、夜間は牧野に放ちて、青草を嚼ましめ、翌朝に至れば、一人の牧童馬に騎して、一種の呼び聲を放てば、數十頭の馬は、自ら列をなし、其逐はるゝが儘に、主家に歸るを常とす、毛色は白、月、色等多く、斑紋頗る美麗なり、斯く白毛の多きは、土地積雪多く、彼の同化によるならんか

憐むべし支那人朝鮮人

晩食後、朝鮮人支那人の住居する村落に散歩す、該村落は、港の北裏、一小丘の麓にあり、此等の人民は、曾て他の人民と雜居を許せしが、例の不潔なるが爲め、鐵道線路に當るを名として、此地に退居を命せられたるなり、其當時、魯國官吏の残忍なる、退居人民の惘然なる、實に言語に絶へたりとなり、退去の命令下るや、魯國官吏は、未だ彼等の住居するにも拘らず、一部より盡く家屋を破壊す、又退居民等は、住むに家なく、建てんか、資力なし、遂に路頭に迷ふ者多かりしと、今も朝鮮人は、住家を建て得ず、盡く天幕の中に住み、支那人は粗造の家屋に住せり、然れども、彼等の平氣なる、赤貧を樂んで、天幕中に起臥するを見る、彼等は斯くして、終に其墓地に急ぐものなり

夜間浦鹽の物騷
巡查の脅迫

夜に入りて涼氣甚し、浦鹽の真相を現はし、忽ち七十八度に降る、即ち晝間とは實に十六度の差なり、聞く當港は夜間は甚た物騷なり、日に没すれば街頭行人殆ど絶へ、午後八時には門戸を密鎖す、其戸締りは甚だ堅固にして、多く二重の戸を用ゆ、以て其人氣一斑を察すべし、戶外散步に時限あり、朝鮮及支那人は午後八時を限りとし、其他は九時を限りとす、若し用事ありて夜中通行するをあれば、巡查の爲めに脅迫せられ、金錢を貪らるゝを常とす、故に夜間は最も巡查を恐る、警察官は人民の保護にあらずして、野伏を兼ねるものあり、併し我日本人は、最も彼等の畏恐する所にして、此災害に罹りたるものは少しと云ふ

浦鹽港の犬

浦鹽港の犬

當港は寒地の常として犬頗る多く、且つ其体甚だ大なり、冬期橋を曳く犬は其体著しく大ならざれども、性質敏捷にして五疋乃至七疋を以て一車に人を乗せ之を曳く而して其法一疋先頭にありて導をなせば、他犬は二列をなし、後に従ひて進むと妙なり、余が市中に於て目撃したる巨大の犬は熊を欺

内地旅行の程
に上る

くものあり、此等の群犬夜深く人定りて、猶々狄々異郷夢冷かなる余等に於ては殆ど眠に堪へざりし

内地旅行の程に上る

八月九日、朝來時々白雨あり、温度八十度(七十六度本)十時頃より快晴となる、昨日來既に略ぼ當港一般の景況を視察せしを以て、今日は少しく内地の情景、即ち有名なる西伯利大平原・魯國農民の生活・地理地質・動植物・大鐵道工事・囚徒ノ境涯・軍隊野營の景況等を視察せんが爲め、當港を距る十餘露里なる、クラスヌイムイスに至り、其近傍を探險するに決す、該地は大鐵道に沿ふて、沿海州の首府、ハバロフカ府の通路に當り、囚徒の屯在する村落あり、又沿道には屯田兵の村落、及軍隊の野營等あるを以てなり

旅行用の馬車

旅行用の馬車

午前八時に於て、驛傳に至りて馬車を命ず、驛傳は西伯利内地に進行する、旅客に向て、車馬を供ふるが爲め、政府の命により、設立するものなり、凡そ二十露里毎に一驛を置く、内地を旅行する馬車は、タラントスと稱し、其構造一種特別のものにして、車に彈機なく、箱は鐵製にして、内に枯草を敷き、客を座せ

いむ、強壯の馬三頭を以て、之を曳く、即ち西伯利内地を旅行するものは、連月車内に起臥、眠食する、驛傳馬車なり、車賃は一時間一留とす、馭者は例の赤鬼なり、扶桑舎よりは、余等の爲め通辨として、土橋氏を伴はしむ、馬車は準備の爲め、昨夜より命じ置きたれども、今朝余等の至るを見て、牧場より牧馬を逐ひ歸り、始めて用意に掛る、聞く内地に旅するには、魯國官吏の先づ通したる後にあらざれば、普通旅人を通さざるの制なりと

魯國民の生活

緩慢なる用意を待つと、凡そ一時間、此間魯國の人民生活の状を、視察するに、不潔と不作法とは、到底免れざるが如し、婦人は跣足にして、朝餐の用意に忙しく、主人は、馬糞に塗みれし衣服を着して、上へ下と奔走せり、余飲水を乞ひしが、婦人はコップを把り、清むると言はん、計りの顔付きにて、不潔なる衣服の裾にて、コップを拭き、而して水を盛りて、與へしには、閉口せり

内地の物驢馬車の暴狀

漸くにして出發するに至れり、土橋氏豫め、余等に注意を與へて曰く、此途中は、白晝も尙ほ劫賊横行して、屢々其狙撃の丸に中りて斃るゝ者あり、希くは

内地の物驢馬車の暴狀

魯國民の生活

意を用およ、馬車は瓦落々々の響騒々しく、市街を離れて北に進めば、共同墓地あり、日本人の墓地は、道傍の上手にあり、白柵を環らし、頗る清淨なり、魯人の墓地は、路の下手にあり、蔓草丈け高く、其十字架を没するを見る、支那朝鮮人等の墓地は、一も見るをなし、知らず、彼等の軟骨は、何れの地に向て埋却するにや、之を過ぎれば、丘陵起伏して、概ね阪路のみなり、馭者は、振り、鞭を加へ、三頭、疾驅す、粗製の鐵車に、彈機なきを以て、激動甚しく、臀部、飛揚し、身は、是れ、籬中にありて、弄せらるゝに、異ならず、胸腹、忽ち、劇痛を訴へ、乘るに堪へず、且つ諸川は、頃來の強雨に、水量を増し、橋梁皆落ちたり、故に、水流に逢へば、馭者は、其鞭を擧げて、一聲高く、馬を叱すれば、三頭、忽ち、躍りて、之を飛越せり、實に、劉備の瀘溪も、斯くやと、計りにて、其亂暴、危険言ふべからず、而して、危険に逢ふ毎に、馭者は、客を顧みて、苦笑一番す、面相惡むへきものあり、余等故らに、平氣の軀を、裝ほへとも、實ハ殆ど、苦痛に堪へざりし

内地の平原及其動植物

抑々西伯利内地の平原ハ、次第に内地に進行するに従ひ、一望際涯なき大平原なりと雖とも、此邊までば、平夷なる小丘多く、一阪を昇り且つ降るものな

内地の平原及其動植物

り、道の兩側には、異様の雜草、人肩を没するまでに繁茂し、或は滿眸の白花、皓々として雪を欺く所あり、凡そ西伯利にて植物の發生界は、北緯五十六度半以南を限りとし、其以北に至れば、凍氷帯に屬し、青物としては夏期僅に、蘚苔の數種あるに過ぎざれども、此邊は一體に森林多く、其密茂せし時は、樹々相摩して、林火を生ずるとありしと云ふ、然れども、近來は人口の増加及鐵道工事等の爲め、濫伐行はれ、巨大の喬木は稀にして、森林と雖とも、凡そ二丈以内の雜木なり、此森林中には、豺、狼、狐、麝、黑貂、等極めて多く、特に虎、豹は、黑龍沿海兩州の特産にして、往々虎害あり、鹿の族は甚た多く、イシユブリ及コズリと稱する鹿族は、角大に其角は、壁間に掲げて、裝飾とする家あり、貂は極めて多きものと見へ、其皮は窓戸の間隙に張りて、寒氣の侵入を防げり、地質上、珍奇なる彼の巨象の遺骨は、北部海岸の洪積層中より産出し、貿易品として市場に現はれ、ヤクースク府に於ては、重要な貿易品なりと云ふ

滿州隊商の露宿を見る

行くと三露里にして川流あり、ヤンチへ河と云ふ、日本人ハ之を一番河と稱す、此河の流域は、地味一般に肥へ、屯田兵の村落、及野營の在る所にして、綠林

滿州隊商の露宿を見る

の間處々に、天幕を張り居然、一村落の觀あり、之を過ぐれば、道傍の一林間に、滿州隊商の露宿するを見たり、其狀は、從來地理書等に於て、散見する隊商に異ならず、一隊凡そ三十名馬匹五十頭、車二拾輛位より成るものにして、茂林中に車を停め、車上には竹を編みたる、アンペラ製の日覆ひを張り、其中に人は起臥飲食し、炊具食器、總て車中にあり、馬は草野に放ちて、自由に藪草を食ましめ、翌朝日出と共に、再び遙に行を起すものなるが、意ふに此隊は、既に歸途にして、一日の休憩を取るものと見へ、余等の歸路にも、尙ほ未だ滯留せり、此等の隊商ハ、滿州吉林地方より、商品を賣し、陸路數月を亘りて、浦鹽に來り、其商品を交易して、再び陸路を経て歸るものなり

内地劫賊の害多し

一番河を距ると、二露里にして二番河あり、本名はセダンへと云ふ、又行くと三露里にして、三番河あり、此等の河流は、四五日以前の強雨の爲め、平原地方の常として、河水非常に漲り、一時河身擴まりて、四近に溢れしものと見へ、道路破壊して甚た惡し、馬車は遠慮もなく、相替らず平氣に疾驅せり、一阪の下に至る、土橋氏再び注意を與へて曰く、是より數里の間、最も物騒にして、白晝

内地劫賊の害多し

劫賊の彈丸に斃れたるもの多しとて、帶ひる所の短銃を出して身構へせり、然れども幸に無事に通過せり、蓋し此邊は盡く罪囚徒の巢窟にして、逃走者多く去りて悉く劫賊の伍に入る、又支那の無賴漢も之れに混同し、勢を合すと云ふ之を過ぎれば、忽ち黒龍灣の東岸に出づ、大鐵道線路は此地を通じ、海濱に沿ふて東に走るを見る、他日溼笛を吹き、文明的炭烟を吐きて、此土を過ぐる時は、即ち此地暗黒の妖雲の所なる時ならん。

大平原中の一孤店

大平原中の一孤店

黒龍灣中に突出する一角は、則ちクラスヌイムイヌなり、此語は紅岬の義にして、東北を指せる花崗岩の岬岨なり、岨麓の一小屋は、扶桑舎の支店なり、午前十一時半、小店に着す、此店は川邊氏の名義にて、日本の壯士四名、店に住居す、實に西伯利平原中の一孤屋にして、寒氣は烏港よりも常に五度も寒き由にて、家の構造を見るに、外面は粘土を以て厚く之を塗り、内面は粗造の煉瓦を疊む、壁の厚さ三尺計り、室内は一尺四方の窓一個を穿ち、壁に光を取るのみ、恰も土牢の如し、此室を住所とし、表には店を備へ、白黒の麵包、クリス(一種飲料)カウパス(鹽豕の肉)鹽鮭、雜貨を販く、是れ主として鐵道工事に従事する囚徒

の需用に應ずるの目的にして、魯國陸軍の保護により設立し、家屋も陸軍より貸與したるものなり、恰も我國陸軍の酒保の如き性質のものなり、斯く罪囚人を花主とする、一種異様の店なれば、煩勞亦甚だ多く、時に或は陳列する物品の強奪に遭ふとあり、斯る時は、勇を鼓して一喝すれば、大に挫折逃走するを常とすと言へり、最初の頃は、夜襲或は賊隊の襲撃等ありしを以て、陸軍の番兵を請ひしが、今は之を撤去するに至れりと云ふ、此小店は、福島中佐を日本人が第一に歓迎響應したる處にして、店の裏手なる黒龍灣濱、風光佳なる所、即ち灣水を隔て、アレヒチノイの燈臺、及マングーガイ、ノウケブス、ク等の綠野を望む所は、實に其歓迎場なりしとぞ。

内地の響應

内地の響應

余等は此の小店に於て、磚茶、麵包、カウパス、クリス、紅鮭等の響應を受く、此諸品は皆西伯利内地の特品なり、磚茶は魯人の大に嗜む品にして、彼等が之を飲用すると甚だ多量なり、我國より益々輸入せば、方法次第には、支那産を壓倒し得て需用限りなからん、麵包は土人の専ら需用するものは、有名なる黒麵包なり、少しく酸味を帯び喫し難し、カウパスは、鹽豕の肉を粉末となし、之

囚徒の村落

を巻きたるものにして、恰も卷羊羹の如く、切りて食すれば味美なり、グリスは醗酵性強き飲料にして、ラム子の如く酸味あり、原と麵包より製すと云ふ

囚徒の村落

響應を了りて、店員の案内により、四近に散在する罪囚の村落を見舞ひたり、一聚落凡そ十七八戸より成り、家は木造、土造の二種より成る、木造は典獄看守等の居宅にして、土造は囚徒の居屋とす、其製地面を掘り下ぐる、こと五六尺上に屋根を覆ひ、四方は土壁を以て圍み、屋根にも亦土を被せたるものなり、故に其状、穴居に異ならず、是れ強き寒氣を防ぐが爲めの製なり、屋内は土間に、枯草を敷き以て褥とす、陰濕甚しく不潔言はん方なし、村落を望めば地面の小埕より、烟の縷々として立ち昇るは、即ち穴居の炊烟なり、村落の中央には、一段高く祭場を設け、自然木を以て欄干を環らし、正面に基督の像を粘附す、毎日朝夕、即ち作業に出づる時、及歸りて後は、此祭場に於て祈禱し、後典獄より訓戒する所ありと云ふ

内地の地質一斑

内地の地質一

此邊の地質も、烏港四近と同じく、太古紀の粘板岩を以て成り、所々崩壊して

植物界

角岩、磊々たり、間々花崗岩あり、西伯利大平原の景況は、行く先き別に大差なきを以て、歩を是より旋らし、歸途に就くとせり、クラスヌイムイスの小店に立寄れ、店員鈴木氏も、烏港に用事あれば、幸同行すべしと云ふ、是に於て、同行四人なり、馬車を棄て、徒歩し、行々地質を察し、動植物を採集し、岩石、動植物共に、標本數十點を得たり

植物界

森林の喬木は半寒帯産にして、鍼葉科中の良材は、新羅松、柏と稱すなり、多く實を着け、其實は食用となる、潤葉科にては、樺、胡桃、榆、槭、塞子樹、菩提樹等なり、槭類は甚だ多く、數抱の巨木少からず、樺及榆の皮は、家屋を被ひ、家具、帽子、夏衣を製する爲め、土人に向て要用なり、在魯日本人の天絨樹と稱する、魯語バルバス樹は、其葉胡桃に似たり、水理密にして堅緻なり、余は紀念の爲め、其一幹をステッキとして歸國せり、日本にて常在樹なる松、杉の如きは、一株だも見るをなし、是れ植物帯の上層に位すればなり、故に林相我邦とは全く異觀を呈す、蓬草は森より森に亘りて繁茂し、時を得顔に細花を着けたり、是れ此地の艶陽芳春なればなり

害虫の發生

害虫の發生

此の叢中には種類多の害虫を棲息せしめ、異種の蝶、蜻、蟻、蜂等は、此の閑静の平野を樂んで、其子孫を繁殖せり、特に此の無敵にして、手足顔面を襲ひ、時として家畜を斃死せしむるもあり、蠅も甚だ多し、此地の此及蠅は、其生存期の短き故に、夜間も尙ほ營々として、貪食に忙しく、人畜を煩悶せしむ。林叢の草木は、我邦に於ては、曾て見しとなき種類少からず、只野生の午房百合は到る處多かりし。

屯田兵村落の觀望

屯田兵村落の觀望

一番川を過ぐ、屯田兵の村落は近林の裏にあり、則ち入りて之を見る、此村は凡そ二拾戸より成る部落なり、家は白色に塗れる木造にして、間には雜貨を販ぐ店あり、屯田兵は多く、妻子を有し、兵役の餘暇には雜業を採り、以て一家糊口の資となす、是れ甚だ薄俸なればなり、今は夏期にして、兵役に汲々するの時なるを以て、兵卒は近傍の林間に野營を張り、村には家族のみ残り居れり。林間の野營を過ぎれば、一隊は今作業に操り出さるゝ所にして、兵卒等の服装は、長き白服の上衣に、數字を記せる赤き肩章を附し、上衣に革帶を締

工兵作業場の障害物

工兵作業場の障害物

め、毛布を肩より斜に懸け、各々鋤又は鋸を操れり、而して武器を有せず、下士の號令の下、歩調不揃ひに出發し去れり、天幕と天幕との間には、細き通路を設け、拂て塵なく、彼等の村落よりも、數層の清潔なりし。

工兵の作業場は、二番河の邊にあり、場内には、障害物を設け、其出來方總て甚だ巧みなるを覺へたり、敵軍の騎兵を防禦すべき爲めに備へたる、銃、杭、密井等の排置、或は柵、障壁の堅固なるを、及鹿柴の構成等、余の固より始めて目撃する所なり、余等些細に之を指視せんとなれば、番兵ありて頻りに之を制止す、蓋し、余を外國軍人と誤認し、其秘密を發かれんを恐れてなりと、通辨は言へり。

麥酒醸造會社後園の小酌

麥酒醸造會社後園の小酌

一番河の近傍に、麥酒醸造場あり、寄りて之を見る、會社は煉瓦屋にして、一年の醸造高甚だ多量なり、浦鹽は、酒類の輸入は、殆ど禁止の姿にて、以て、自國の造酒業の發達を保護するにより、此會社の如きも、其醸造高は、土地に比すれば頗る多額あり、會社には、後園の設けありて、椅子、食卓を林間所々に備へ、

顧客の需めに應じて、麥酒を飲用せしむ。試に後園に至れば、園は綠樹鬱蒼の間にあり、前面には廣大なる黒龍灣を控へ、烟波茫茫の裏、白帆の飄渺たるを望み、近くは紅蓋白壁の兵營續々として海濱に巍立し、大鐵道は其間を縫ふて走るを見る、其景實に佳なり、伴ふ所の鈴木、土橋の二氏も、渡來以來西伯利に於て始めて見たる絶景なりと言ふ、即ち麥酒を命じ、且つ飲み且つ賞し、忽ちにして七八巖を倒す、神心爽快、氣宇揚り、大鐵道を睥睨しつゝ、亞細亞論を始むるものあり興盡きず、然れども前途の未だ遠きを以て、愛を割きて園を辭し、前途を急げり

蠻子芝居を観る

朝鮮人の住める村落を過ぎて、將に烏港の市街に着せんとす、忽ち見る、或る岡丘の下に、支那人の非常に群集雜沓するを認めたり、就て之を聞けば、兩三日來、支那の祭日に際し、彼等餘興の爲め、則ち蠻子演劇を興行するものなりと、余等忽ち好奇心の爲に誘導せられ、遂に一幕を立見せしを以て、其略況を記し置くべし

演劇の仕打

蠻子芝居を観る

演劇の仕打

演劇場は、支那寺院の前面に設け、豊樂興行とす、固より大概支那人を以て充たされ、餘の各國人は恰も晨星の如し、余等の入場せし時は、休憩中にてありしが、待つ間程なく異様の囃しは生まれり、大鼓、ジャグワラン、胡弓、チャンメラ、蛇味線等、駘々敷き鳴り物の中に、幕は開けたり、先つ一樣に赤服の扮装をなしたる、二人の男出て來り、左右に相對して立つ、其次に出で來りしは、黄色の陣羽織様の服に、益大の黒紋あるを着したる老人にして、手には羽扇を把り、腰の繞りには數多の鈴を下げ、熊谷ノ次郎、直實とも謂はん、足並みを以て歩み出でたり而して、赤服者兩人の中間に立ち、異様の語を以て羽扇を振り舞はし、暫し、飛び歩けり、斯くして幕に入れば、次には同様の扮装者八人、拍子に連れて出來り、無言にて舞臺を躍り廻れり、此間鳴り物非常に駘がしく、足音と相和して耳も聳する計りなり、暫くありて幕に入れば、一人の女装者は、長裙様のものを被り、宇宙を飛ぶが如くに出で來り、迂路々々として尋ぬる所あるが如くなるものは、想ふに戀人を物色するものならん、此處に一道士來掛れば、狂女(？)の之れ幸と、戀人の在り家を訪ふに、道士は懇々之を慰め且つ諭すが如き有様なり、此間狂女は、屢々異様の聲を揚げて啼く様、如何にも

可笑かりし仕打ち宜しくありて幕となる、其道を解するものには、面白きものならんかなれども、吾々には實に馬鹿らしく、先づ我が狂言位のものあらんか、傍りの支那人を見るも、日本の演劇の如く、餘り興に入りたるものなき様なりし、觀劇の傍ら場内の光景を見渡すに、種々のとありて、演劇よりも却て面白かりし、今其一二を記せば

劇場内の光景巡査の醜態

第一には支那人の商賣に抜け目なきとなり、場内に陳列する飲食店の如きは勿論、青物屋、床屋までが場内に所狭しと店を張り、床屋の如きは甚だ便利にして、客(支那)は床屋の椅子に掛け、頭を剃らせながら觀劇するの趣考なり。次には魯國巡査の不法なるとなり、堂々たる帝國の警官、場内鎮撫として出張し、威儀嚴めしき官服を着しながら、支那人の陳列したる、此處の菓子店、彼處の青物屋より、菓子、瓜、茄子に限らず、無代價にて強奪し、之を丸嚙りしつゝ、平氣に場内を巡察する様は、世に形容の詞なき奇觀なり、支那の小賤奴等は、巡査を虎の如くに打ち見守り、何時我店より、茄子一本も強奪せられんかと恐れ、彼等の視線は常に巡査の行く先に注げり、斯の如く巡査の破廉

劇場内の光景
巡査の醜態

耻なるは、其故なきにあらざ、當港は物價の貴きに、巡査は實に薄給にして、連も生活するを得ず、是を以て遂に賄賂貪食等を以て、歴に糊口すと云ふ

浦鹽物價一斑

序に物價の一斑を示せば、摘髮料三十哥(二十四錢以下全)湯錢、日本湯十哥、魯西亞湯一留三十哥・ヲーツカ酒三合銀六十哥・其他之に準ず、中にも青物は拂底にて最も貴く、黃瓜一本二十哥・西瓜一留三十哥・にして多く日本より輸入せり、而して此等の品は、敏捷なる支那商の手によりて輸入するを多しとす、日本商人も着手すれば、利なきにあらざるべし

事務館廳席に於ける談話

午後五時扶桑舎に歸着すれば、二橋貿易事務官より小森氏と共に、本夕晚餐饗應の招待狀、到來し居れり、午後六時招きに應じて事務館に至れば、東京丸事務長小澤氏、并に扶桑舎主川邊氏、亦招中にあり、既にして余が同郷人なる、加藤惠證師、當港本願寺派出員、矢田省三師と共に至る、加藤氏は、西伯利布教及當港に本願寺別院、建設の爲め、本願寺より特派せられたるものなり、余曾て之を耳にせざるには、あらざりしも、今此の廳席に於て、卓を同ふせんとは

事務館廳席に
於ける談話

思はざりしを互に其奇遇を喜ぶ、主人は二橋氏夫婦及田野豊氏なり、宴火にして魯國事狀に就き種々談話あり、二橋氏曰く、我が日本人が國家思想を發揮するは實に外國に於て現はると謂へし、當港開場以來未だ曾て日本人の犯罪者を出さず是れ全く在留人が國家的觀念あるに外ならず、一醜事件あれば常に曰く、一個人としては尙ほ可なり、獨り帝國の體面を汚すを奈何にせん、斯の如き觀念常に深きを以て、當港に於ける日本人の名聲は頗る高く魯國人は日本人とさへ謂へば既に惡事を爲さざるものと信じ、雇傭の人も常に支那人よりも數層の待遇をなせり云々、加藤氏は此程にコリスク府まで内地を旅行せるなり、例の快辨を以て其困苦を述べて曰く、西伯利内地を旅行する人は三つと言ひたれども先づ二つの生命は必ず持つものならざるべからず、ムジカの馬車は乘るに堪へず、之れにて河を越へ谿を渡るに際し、若し一步を誤れば、人馬共に數仞の谷底に落ちざるべからず、之を免れしものは只雁に馬の力によりて、之を飛越するの一事のみ、又途中には往々劫賊の出沒するあり其危險言ふべからず云々、余等も亦内地旅行の實話を陳ぶ、談總て珍奇にして興味未だ盡きず、時十一時に及ぶ頃一同辭し歸

る、街頭人影を絶ち、只群犬の高く叫ぶのみ、加藤氏の寓所なる、本願寺に立寄り、歸宿就禱す

浦鹽を出發す

八月十日快晴、朝八十四度(無七十六度本)、當市第一流の商店なる、獨逸アルベルス商館に至り、種々買物をなし、又蠻子の市場に於て、物品數點を求め、夫より貿易事務館に至りて告別す、川邊鈴木橋等の諸氏に送られて、支那の赤猪牙船より東京丸に乗組めり、同船者は小森、加藤、川田の三氏、及び佛人美好(フレイ)氏と、共に五名とす、他等の室には、日本人二十二名、支那人凡そ百名、朝鮮人十六名乗組めりと云ふ

醜業婦

醜業婦

舢舨に婦人の一連を乗するもの兩三艘あり、諷視すれば、皆日本婦人にして、即ち所謂醜業婦なり、彼等今顧客を本船に送りしものなり、其粉粧を見るに、束髪にして洋裝するものあり、或は大柄編の日本服に、細帯を締むるものあり、靦然耻る色あく、揚々支那語を放ちて、舟を隔て、蠻子の舟子等と戯談す、醜態見るに堪へず、然れども、萬里の波濤を踏んで、未知の境に入り、言語不通

の異物を相手として、彼れが財を絞り、跋扈跳梁するに至りては、其勇に驚かざるを得ず、何れの外人も、我醜業婦には常に一目を譲ると云ふ、而して有將男子は、却て猫額大の内事のみ汲々として、身自ら洋波を踏んで、富を外邦に覓むるが如きは稀なり、日本男兒は、終に女子の勇に若かざるや、とは當港一般の評なりと聞く。

浦鹽の名殘

二橋事務官野村書記生亦送りて船中にあり、互に別を叙して分る、彼れ是れと陸上の市街を指顧するの際、船は進行を始め、在留の本邦人等は、分袂の情に堪へざるものゝ如く、船の進むに従ひ或ハ帽子を振り、或は手巾を振りて別を表す、異邦在留の人にして、郷國の海城に別る、左もあるべし、船客も亦暫時の馴染なる、浦鹽を去るの感に甚へず、皆甲板に立ちて願望す、船は炭烟を殘して進み、阜頭に屹立する、彼の綠色の高塔、赤色の連屋、其形漸く小に、遂に又見るべからざるに至れり

船中加藤師の快談

船中加藤師の快談
船、金角灣頭を離れんとす、細雨霏々として至る、金角灣の南角を廻れば、丘阜

浦鹽の名殘

船中加藤師の快談

に據りて建てたる、支那人の小部落あり、石材を浦鹽に出す産地なりと云う、浦鹽四近ハ、一面の平原、加ふるに偶々岩石あるも、破碎し、易き太古岩なり、故に石材には甚だ乏し、浦鹽の建築時代にして、石材を是より出す、支那人の着眼も亦敏なる哉、加藤師は、彼の勇辨を以て、魯國内地の不昧哉なるを、土耳其風呂入浴の失策、魯西亞芝居見物の快談等、諧謔百出、人をして解頤抱腹せしめ、船中の無聊を覺へざらしめたり、此日終に滿州の亂山中に没し、日本海中、晚風涼を送り來りて、快甚し

日本海中奇遇に驚く

八月十一日快晴、朝八十二度（本終日濤波平穩にして、甲板上に於ける船客各自の娛樂、見るも亦樂し、船中の無聊に、船室備へ附けの、日本新聞を閱すれば、玉石同架欄内に、偶々加藤師著述の、増補木佛畫像論の批評あり、而して拙著、日本帝國政治地理の批評も、亦共に一欄内にあり、是に於て、其奇遇に驚き、直に加藤氏に示せば、氏も亦大に其奇遇を語り、且つ曰く、同欄内にある、效學史論の著者、小栗栖香平も、亦實に僕の實弟なりと、是に於て、益々其奇遇に驚く、千里異域に於て、加藤師に邂逅する、既に奇遇なり、其共に同船する、又奇

日本海中奇遇に驚く

遇なり、而して同船中に於て、同欄内にある、兩著書の批評を讀む、更に奇遇なり、加藤師實弟の著書も亦同欄内にあるに至りては、又更に奇遇と謂はざるべからず、加藤師は、其著書數十部、收めて行李の中にあれば、元山津着港の上は、贈與すべきを約せらる

元山津に入港す

談笑時を移す内、船は早く既に、永興灣内に進入し、元山遠からず、例の筵を張りて帆に代へたる、韓船頻々來往し、麗島と、達島との間には、霧に沈没したる、魯艦は既に其橋頭のみを現はし、水道危険の紀念を存するを見る、午後二時、元山港内に投錨すれば、港内には、北青地方に航行する、朝鮮漁船、元山號の碇泊するあり、此漁船は、日本より買ひ取り、船長を始め、機關手、運轉手共に、日本人を用ひ、定期航海をなすものなり、朝鮮にして、漁船を所有し、其沿岸を航行するに至りしは、是れを朝鮮の一大進歩と謂はざるべからず

元山に於て各前途の目的を定む

余は加藤小森の兩氏と共に、小澤事務長の好意により、東京丸の短艇に乗じて直に上陸し、先づ第百二銀行支店に寓する、余等の同行者なる津野氏を訪

元山津に入港す

元山に於て各前途の目的を定む

へば、氏は欄に倚りて東京丸の入港するを佇望し居れり、互に其無事を祝し、三人圍坐して前途の行路に就き、各々其目的を陳す、小森氏は、本港より馬背によりて、陸路直に京城に横ざるに決し、野津氏は、脚疾の爲め、東京丸によりて一旦釜山に戻り、再び肥後丸によりて仁川に至り、京城に入るに決す、余は、九月一日より始むべき、高等中學入學試験期に後るゝを以て、東京丸にて釜山に至り、釜山より玄海丸によりて、直に歸朝するを以て、八月廿九日にあらざれば、仁川發歸朝の便なし、左すれば、九月五日頃にあらざれば、歸着するを得ざるを以て也

領事館の談話及氣候

晩食後領事館に至り、中川副領事、及中村氏に面會し、朝鮮の事情に就て、互に其所見を述べ、偶々當港郵船會社支店長、村井氏も亦來館す、氏は其實験よりして、韓人仲仕の体力、及勉強力の、大に日本人よりも勝るを、陳ぶ、其他種々談話に時を移し、午後十時、館を辭して銀行に歸り宿す、當銀行は、對州嚴原の支店にして、對州人塚本俊、岡部武藏の兩氏之を主宰す、兩氏余等を遇する甚だ懇到なり、是を以て、別に逆旅を免めざるに至れり、當港は、津野氏の滞在

領事館の談話及氣候

中即ち本月五日以來殆ど毎日の降雨にして今朝に至りて漸く晴を放つに至れり此雨天の間は氣温は常に七十六七度の間を昇降し冷氣を覺へ爲に寒附せりと云ふ然れども本日は新晴に至りしを以て午後三時には八十八度(熊本八十九度)に上昇したり

加藤師の演說會及小森氏の出發

八月十二日晴加藤師より其著書木佛畫像論を贈り來る即ち前約を履むなり師は日韓舎に投宿し明後十四日より三日間當港在留者に對して佛教演説をなす趣にて市中所々に大文字を以て大日本十八高僧中演說大家加藤惠證師云々の廣告あるを見る當日の盛會知るべし尋て氏來訪せらる氏の當港に關する法用は凡そ五日間にして辨ずべし然るに次便薩摩丸を待てば二週日の後にあらざれば當地に寄港せず其間無聊に消光せんよりは法用を了り次第京城に陸行すべしと言へり・小森氏は通辨人馬匹食料等總て陸行に要する準備一切整ひしを以て午後二時出發するに至れり余が持する所の短銃を貸與して氏が内地旅行の護身の用に供へしむ又加藤氏には内地に於て安眠に要用なる空氣枕を貸與す小森氏は告別の下馬に跨り

加藤師の演說會及小森氏の出發

て出發せり加藤氏も亦歸寓す

元山の村に遊ぶ

元山の村に遊ぶ

余は未だ韓人の巢窟なる元山村を見ざりしを以て通辨人を伴ひ直に元山に向て出發す先つ元港監理衙門に至り主事申衍模氏に面會し當地に於て求めたる咸鏡道吉州産の石器數種に揮毫を求む氏は當國に於て能書の間へある人なるを以てなり申氏喜んで之を諾す對話の後衙門を辭して進めば途中に一川あり橋断つ韓人其背に負ふて之を渡す途にして浦鹽港より同船したる篠原某に逢ふ某も亦元山を遊覽せんとする者なり則ち同行して元山に達す元山の村は戸數二千と稱す矮屋列をなし其不潔狹隘なるとは草梁釜山に過ぎたり新羅松の實を求むるが爲め所々を搜索して遂に全市を通して其端に至る皆殆ど一様の矮屋のみにして富家(比較的)と思はしきもの絶て目に觸るゝなし此部落は咸鏡道に於ける屈指の都會なれども物品を販ぐ店としては頗る稀なり偶々之れあるも兎戯よりも尙ほ甚しく俗に謂ふ狸の店なり大店と雖ども五圓に値すべき商品を陳列する肆舖は恐らくはなかるべし彼の瘦犬の群起して人を吠へ路傍に糞山の累たるは極り

韓の娼家を視る

物にして不快甚し

韓の娼家を視る

篠原某は、頗る輕快の人なり、戯に娼家を見んとを強ひて止まず、依て誘ふが儘に至り見れば、凡そ四疊敷位の間二つあり、一個の食卓を備へ、卓上には食具數種を陳ね、韓人數名卓を圍みて會飲するあるを見る、而して一の娼婦を、意ふに外人の來るを知り、早く已に姿を隠くせしものならん歟、歸途は、村中街路の不潔に堪へざるを以て、避けて郊外に出で、路を山麓に取る、松風不潔を拂ひ、綠草路に布き、蘇生の想ひあり、天然の美は實に吾人に負かざるなり

韓婦の汲水

韓婦の汲水

路傍の山麓に一湧泉あり、實に全村を養ふ所の要水なり、韓婦等群集し、交々來りて之を汲む、余等の至るを望み見て、忽ち驚きの叫を揚げて逃れんとす、是に於て通辨人をして、余等の他なきを通せしめ、而して余等は、故らに叢中に避けて見ざる似して、彼等の爲す所を見るに、瓠製の釣瓶を井中に投じて、水を汲む、釣瓶輕くして水を入るゝと至難なり、其迂濶知るべし、瓠製の釣瓶

元山津の告別

に汲みしものは、凡五六升をも容るべき、粗製の甕に於て、之を頭上に頂き、三々伍々且つ行き且つ歸る、其狀皆同じ、遠きものは七八町の家に運べり、此の五六升を容るゝ一甕中の水、即ち一家の命脈なり、清水の缺乏する思ふべきなり、婦人の頭上に水甕を頂くや、甚だ巧みにして、或者は其背に褌子を負ひ、而して頭上には満水の甕を載せ、左顧右盼して來往するの狀ハ、眞に一の輕業に異ならず、村にて數種の蠻品を購ふ、余も少しく韓語に習ひ、オルマヨ(何幾)の語を放ちて數品を問へり、午後六時歸宿す

元山津の告別

宿に歸れば、銀行員より、告別の爲め一盃を獻ぜんとして、津野氏と共に招かる、宴席には紅裙數名盃を侑む、皆日本種なり、異邦に於て、珍敷く三味線を聞けりとして、打興せり、中川副領事、村井支店長來訪せらる、次て大木、中村の兩氏も、亦告別の爲め來訪せられ、種々快談の中、時十時を過ぐるを以て、宴席を辭し、銀行員に別を告げ、津野氏と共に東京丸に乗組めり、時に午後十一時なり、本船には村井、梶山、上利、岡部、島雄等の諸氏送り來らる、加藤氏とも再會を期して、袂を分ち、船室中に就褥す

航海中の珍聞

航海中の珍聞

八月十三日、今曉三時、船進行を始めたり、是より釜山に至る凡う三百餘里、再び羊股牛嶺の食卓に向て、數日を送らざるべからず、然れども長途航行の船中、無聊なる中にも、亦種々の珍聞あるものにして、今其一二を擧ぐれば、第一は、昨夜元山より本船に乗込みたる乗客中、蓬髮長髯にして、白布を以て左腕を包みたる、一個の日本人、我居留地巡査に擁護せらるゝものあり、之を船員ふ叩けば、彼れは朝鮮内地に於て、韓人と争鬪を生じ、遂に彼の地方官より、我が元山領事館に引渡され、再び裁判の爲め、釜山總領事館に護送せらるゝものなりと、余之を奇とし、其始末を聞くに、彼れは某縣の壯士某、三十年なる者なり、頗る慷慨激昂の軀にて、偶々時事に感ずる所ありて、單身滿州に入らんと欲し、對馬より和船に乗りて、朝鮮統營に上陸し、身は僧侶に裝ひ、幸に少しく醫事を知るを以て、藥品數種を持ち、且つ賣り且つ行き、義州を経て、本年四月中旬、正に滿州境を距る、厓に二十四里なる、明川に達せり、爰に日本人の同行者六名を得て、一行七人となり、將に北に向はんとなす、元來此邊の人質は、頗る慄悍を以て聞ゆ、土人は彼等一行の、通行するを忌み、小事を以て事端を開

き、少しく争鬪中、忽ち韓人の嘯集する者、凡そ八百名の多きに達し、一行遂に其重圍に陥れり、然るに一行中護身の刀劍を持つるは、厓に某一名、是に於て、止むを得ず、三人を斬り、衆寡敵せず、身は投石亂撃の下に倒れ、韓人の爲めに擒となり、鐵鎖の縛を受け、亂打歐擊至らざるなく、或は錐を以て、背部十八箇所を刺され、遂に監理の手に渡されたり、左腕の重傷は之れが爲めなりと、又背部には錐痕斑々たるを見る、頭部は投石の爲め、數所の痕痕を留む。且つ監理の手にあると、凡三十日、此間創傷を醫せざるは勿論、兩腕は緊縛せられ、兩肩相接するに至り、頭は樹枝より鐵鎖を以て釣り、脚には杆を約して其自由を制し、飲食物を與ふると甚だ稀なり、而して其能く死に至らず、以て今日あるものは實に天なり、斯くて三十日間拘留の後、元山の我領事館に護送す、其里程凡そ一百里の間、二十日を費して、漸くに、達せり、護送するや牛車に載せ、官人五名之を警衛す、而して途中警衛者の教唆より起る、土民の投石は、到る處雨の如く來り、途次斃んとするもの數次、漸く元山領事館に達するや、始めて生命を蘇せし心地にて、實に歡天喜地例ふるに比なかりしとぞ。以上の事果して信なるや、固より之を保せずと雖ども、聞て爲めに一滴の涙な

佛人美好氏と語る

き能はざりし

佛人美好氏と語る

其一は、同船者、佛人美好氏なり、彼れは日本に在留する、既に十一年に及び、去年讃州高松の人某女を娶りて妻とし其姓の (Thico) なるを以て美好と稱すと云ふ、彼れは、佛國有名の美術家の由にて、曾て我陸軍士官學校教師たりしと云へり、今は英國及佛國の繪入新聞畫報通信者にして、併て濃尾大震災の時には、直に出張して、實地の慘狀を彼の國に畫報し、大に兩國讀者の慈悲心を惹起せしめたりと云、今回の旅行は、本國なる新聞社の依頼に應じて、近來世界耳目の集まる所——而も東洋の急所たる浦鹽斯德港の實地囑目したる眞景を畫報する爲め、二ヶ月以前に渡航し、浦鹽及西伯利内地の實況を寫生するもの少からずとて、其行李を解きて、示さる其風俗其風景、共に眞に迫り紙表に生動せんとするの勢あり、又行く先き、朝鮮の景を寫すを見たり、此等の畫報、彼の紙上に顯はれ、其愛讀者が、絶東の風俗を座して知るも、將に遠きにあらざるべし、西洋人の絶東に意を注ぐ、豈に敏ならずや、吾々東洋人の果して如何

日本海中の水族

日本海中の水族

此日朝來、江原道の沖合に於て、數々鯨の出沒するを見たり、又イルカの無數群をなし、水面を跳りて進行するを見る、日本海中の水族は、水面に躍りて、開が同族の夥しきを誇り、以て漁夫を待つもの、如し、嗚呼誰かある——此日正午の氣温、八十七度(熊本九十一度)を示せり

火山岩の配布及地震

火山岩の配布及地震

八月十四日、曉來一天拭ふが如く、氣温八十四度を示す、人皆一日に氣候の炎暑を加ふるが如きを覺ゆと言へり、江原道沖も既に過ぎ、慶尙道の諸山峯多くは、花崗岩にして、山々骨を露はし、頗る奇相なり、又海岸所々に、火成岩の噴出少なからざるを見る、津野氏と語るに、朝鮮は吾等の幸て聞く處によれば、火山岩少く、又地震もなく、朝鮮人は地震なるものを知らず、韓地は實に平穩にして、不活潑の土地柄なり、杯と聞きつるに、今實地を視たる處にては、聞く處とは大に相違し、火山岩斯く多きより見れば、恐らくは地震もあるならん、と言へを、傍らふ在りし、元山郵便局長吉田氏、私用を以て東京に歸るもの之を聞て曰く、朝鮮國に地震なしとは、恐らくは誤りならん、予は本年の四月

赴任せしが爾來既に二回の地震を感じり、因りて之を他の在留人に問ふに、地震は往々感ずる所にして、格別珍しからずと謂ふ、又韓人に就て地震の事を問ふに、韓語「チドン」と稱し、即ち地動にして、地震の意なりと、是を以て考ふるも、朝鮮に地震を感ずるとは明なりと語れり、余の嘗て聞く處誤れる歟、余は在韓中、地震を感ぜざりしを以て、之を證明するを能はざれば、暫く記して疑を存す

再び釜山に上陸す

兎角の間に、水天彷彿の際、絶影島見へ、釜山も既に遠からず、彼是れの中、五六島も過ぎて、日本居留地の瓦屋、草梁洞、富民洞等の茅屋點々、目睫の間にあり、是に於て、船客皆言へり、恰も既に日本に歸着せし心地すと、午前十時東京丸は釜山港内に投錨す、直に上陸して再び大池方に投ずれを、既に知己のみにて、成程日本に歸りし心地せり、喫飯入浴の上、總領事館を訪ふ、室田總領事は、只今入港せし帝國艦隊、高千穂、千代田、高雄の三艦中、威仁親王殿下、乗組み玉ふを以て、拜問の爲め艦に至り不在なりと、是に於て、山座、瀬川、川上の諸氏と語り、歸途、朝鮮産物數種を購ひ、日本長崎に向て歸航すべき、玄海丸の出港時

再び釜山に上陸す

間、已に迫るを以て、再會を約して津野氏并に其他の諸氏に別れ、玄海丸に乗組む、船室内は余一人にして、甚だ寂寥を感じり、此行僕僕にも海外にあるの間は、好伴侶あり、前には小森氏を得、後には津野氏を得たり、然るに今始めて單身となり、今更の感ありし

高麗水道を過ぐ

午後六時、玄海丸は肥後丸よりも一步先ちて進行を始め、次で肥後丸は津野氏を乗せて出港す、彼は全羅道の沖に向ひ、我は高麗海峡に向ふ、故に北東相別る時に、落日暮風を送り來りて、波浪頗る高し、聞く暴風起らんとすの警報達せりと、且玄海丸は支那太沽より白河を遡り、天津に航するの目的にて、特別に構造せし者なるにより、吃水淺く動搖烈しきを以て、有名なる船なりと、夜に入り北東よりする強風の爲め、船舳の動搖益々甚し、然ども余は船暈を感ぜず、是れ既に航海に習慣せしによるか、此の行海路既に一千三百八十餘哩を過ぐ、慣れざらんと欲するも、能はざるべし、夜二木事務長と甲板上に語る

對州の觀望及其近海

八月十五日、平明船は既に對州の西岸を沿ふて進行せり、對馬の地勢山相共

高麗水道を過ぐ

對州の觀望及其近海

に歴々として辨ずべし、對州の山は頗る朝鮮的にして、北東に走り、地質は中古紀に屬する、粘板岩、砂岩及頁岩等なるが如く、間々花崗岩若くは石英斑岩等の峻峯ありて、鳥勢甚だ勇壯なり、且つ其近海處々には峻嶮削るが如き小嶼散布し、白帆の朝風を孕んで、其間を縫ふ、杯風景佳絶と稱すべし、下縣島の北角を離るれば、即ち對馬海峡なり、之を過ぐれば、平戸、五島の間にして、右舷は五島の群島、朝霧の間に隱見し、我國有名の漁場とて、漁船の泛々とし、波を凌ぐもの、頗る多きを見る

長崎に入る感懷

此朝六時に於て、寒暖計は八十八度に昇れり、肥前は日本第一の島嶼に富むる所なれば、彼處此處に散點して、蒼波一面に模様を畫ける、大島、小島の間に過ぐ、今般風景なる、韓山、魯水の間より來りて、此好景に迎へらる、實に愉快の感ありし、我國風景の世界に鳴る宜なる哉、而して波路穩に、我西南の門戸なる、長崎港内に投錨せしは、午前十時三十分ありし、港内には松島、嚴島の兩艦及び各國の軍艦、商船等碇泊し、開港場たるに負かず、繁昌は則ち繁昌なり、然れども彼の魯國……而も浦鹽斯德港頭に於て、二十一箇の砲臺を運ね、二十七

長崎に入る感懷

隻の軍艦を浮べ、陸には瀛車の西を指して走るあり、兵營の斐を運ねて、鐘ゆるあり、見るとして、武兵、戰軍にあらざるハなき軍港を去りて、今直に其衝に當る、我帝國の門口なる、崎陽に入り來りて、關門一兵の懸なく、灣頭砲臺の堅めなく、人々無事太平を歌ひ、麥帽浴衣に日傘を翳し、風にも堪へざるが如き、青年等の徘徊するを見ては、如何に強く余の感を呼びしぞ

渡航者須知

爾後渡航者等の爲め、余が此般の旅行各地、及之に關係ある、各所の事物に就き、余が知れる所を、左に列舉すべし

郵便料(通幣書信料を示す)

- 釜山、元山、仁川、京城より日本各地へ、日本内地と同制度
- 浦鹽斯德より日本各地へ、十哥(我八錢に當る)、端書日本各地へ、四哥
- 日本各地より浦鹽斯德へ、五錢(但し日本郵便切手)

電信料

○京城より釜山へ漢文每字拾、壹錢、歐文每語貳拾、二錢
 ○釜山より日本各地へ一音信(但し假名)四十錢、歐文每語全上
 ○浦鹽より日本各地へ歐文每語一留五十哥

航程

長崎釜山間 一六二湮
 全 元山間 四六〇湮
 全 仁川間 四五八湮
 全 浦鹽間 七九三湮

船便

○東京丸 神戸、馬關を経て釜山、元山、浦鹽へ凡毎月一回
 ○薩摩丸 神戸、馬關、長崎を経て釜山、元山、浦鹽へ凡毎月一回
 ○玄海丸 神戸、馬關、長崎を経て釜山、仁川、芝罘、天津へ凡毎月一回

○肥後丸 神戸、馬關、長崎、嚴原を経て釜山、仁川、芝罘、天津へ凡毎月一回
 ○白川丸 神戸、馬關を経て釜山へ凡毎週一回
 其他商船會社瀛船にて凡毎月一回神戸、馬關、釜山、仁川に航するもの
 及魯國ウラジミール號長崎、浦鹽間を定期往復す

乗客運賃表(浦鹽より長崎の歸)

地名	上等	上等往復	中等	中等往復	下等
長崎馬關間	八圓	拾貳圓	五圓	七圓五拾錢	貳圓
全 神戸間	拾六圓	二拾五圓	拾圓	拾五圓	四圓
全 橫濱間	貳拾五圓	四拾三圓	拾六圓	貳拾六圓	六圓半
全 上海間	貳拾圓	三拾圓	拾貳圓半	拾九圓	五圓
全 釜山間	拾貳圓	貳拾貳圓	八圓	拾四圓半	三圓半
全 元山間	貳拾四圓	四拾三圓	拾六圓	貳拾九圓	七圓
全 仁川間	貳拾四圓	四拾三圓	拾六圓	貳拾九圓	七圓

全	芝罘間	三拾五圓	六拾三圓	貳拾貳圓半	四拾四半	拾	圓
全	天津間	四拾五圓	八拾壹圓	貳拾九圓	五拾貳圓	拾三圓	圓
全	牛莊間	四拾五圓	八拾壹圓	貳拾九圓	五拾貳圓	拾三圓	圓
全	浦鹽間	三拾八圓	六拾八圓	貳拾五圓	四拾五圓	九圓	圓
釜山	仁川間	拾六圓	貳拾九圓	拾	拾八圓	四圓半	圓
全	芝罘間	貳拾八圓	五拾四圓半	拾八圓	三拾二圓半	八圓	圓
全	上海間	三拾五圓	五拾五圓	貳拾貳圓半	三拾五圓半	拾	圓
全	元山間	拾四圓	貳拾五圓	九圓	拾六圓	四圓	圓
全	浦鹽間	貳拾八圓	五拾圓	拾八圓	三拾貳圓	八圓	圓
仁川	浦鹽間	四拾四圓	七拾貳圓	貳拾六圓	四拾七圓	拾壹圓半	圓
全	芝罘間	拾貳圓	貳拾壹圓半	八圓	拾四圓半	三圓半	圓
全	上海間	貳拾九圓半	五拾三圓	拾九圓	三拾四圓半	八圓半	圓
元山	仁川間	貳拾九圓半	五拾三圓	拾九圓	三拾四圓半	八圓半	圓
全	芝罘間	三拾八圓半	六拾五圓	貳拾五圓	四拾五圓	拾壹圓	圓

全	上海間	四拾九圓	七拾八圓	三拾壹圓半	五拾壹圓	拾四圓	圓
全	浦鹽間	拾四圓	貳拾五圓	九圓	拾六圓	四圓	圓

旅籠店及宿泊料

○釜山 入江町大池忠助 辨天町津吉馨助 全町松野友吉

全町小島雪 女 幸町豊田福女

宿泊料は一泊貳拾錢より三拾五錢まで(尤も普通を示す特別は之を除く以下同じ)

○元山 福島屋友吉(長崎) 津場須美女

宿泊料は福島屋は一泊三拾五錢乃至六拾錢津場方は西洋風旅店にして一日三圓一ヶ月六拾圓とす

○京城 橋本玄榮 原田庄助 萩園亭主坪田又藏

宿泊料は大略六拾錢以上

○仁川 淺岡利吉 郡金三郎 福島友吉 原田金三郎

以上は日本風旅店にて宿泊料は一日三拾八錢以上

大佛主人堀久太郎 別府直三郎

以上は西洋風旅店にして宿泊料は一日貳圓、此外西洋風旅店には支那人、獨逸人の營業するもの各一店あり

○浦鹽斯德 扶桑舍主川邊虎

宿泊料は一日八十哥、其他惡人の旅店二あり、宿泊料は一日一留八十哥、乃至三留なり

内地旅行の用意品

○朝鮮 内地は行路不便にして酒幕はとも日本人の用を足すと能はず、故に其携帯品には限りなしと、雖ども如何なる旅行にても左の品は必ず携へざるべからず

○護身器(短銃又は)○毛布一枚○醬油○鯉節○藥品(毒物・解熱・ピットル・解毒薬・コロタイン等)

紳士的旅行をなさば以上の諸品に加ふるに

○罐詰の食品○雨具○蚊帳或は紙帳(夏期)○提燈蠟燭○石鹼○酒類○防寒具(冬期)○食器

○西伯利 此の内地も亦無人の域多きを以て、不便少なからざるなり、故に大概以上の諸品を携帯するを要すと雖ども、西伯利内地は寒暑共に烈しき地にして、特に冬間は氷點下數十度に降る烈寒の地なれば、冬期此間を旅行するものは、防寒具の用意特に必要なり、然れども此等の防寒具は、逆も温帯國人の豫想に及ぶ所の物にあらざれば、該地に於て用意すべし、則ち○厚き毛裳○毛帽子○裏毛手袋○毛襪○火酒等なるべし、又夏期の旅行者は○蛇を防く用意○驅虫劑床虫除け○飲料水等の携帯必要なるべし

余が今回の巡遊中、沿道各地に於て採集の上、携帯して歸朝したる、學術上の標本及び其他の参考品、數種あれば、左に併録すべし

(1) 礦物及岩石標本 三拾二種

右は朝鮮及西伯利の各地に於て採集したる物なり

(2) 植物標本 十四種

右は重もに西伯利内地産にして朝鮮産は二三種に過ぎず

- (3) 釜港監理衙門より發せし内地旅行護照 壹通
寫は本文中掲けたるものなり
- (4) 魯西亞蠟燭 數本
モスコイ府の産にして牛蠟なり通常西洋蠟より純白にして且つ堅く一本八時間以上を保つ或は他日の輸入品ならんか
- (5) 魯西亞貨幣 三種
銅一哥、二哥、三哥の三種なり
- (6) 支那貨幣 三種
銀貨三種なり
- (7) 韓錢 數種
常平通寶一文及當百なり
- (8) 新羅松の實 若干
一名栢と稱し咸鏡道を以て最も多産の地とす其實は三種の外皮を去りて始めて食すべく蜜積とすれば味美なり
- (9) 朝鮮團扇 數種

- (10) 全扇子 一本
全羅道太邱近傍製數種及咸鏡道製の蓆編製數種なり
- (11) 朝鮮烟管 數種
慶尙道梵魚寺に於て販く一種のものなり
余の携へ歸りし一の烟管は二尺八寸にして一は三尺三寸五分の長さあり簡單なる彫刻を施し吸口は琥珀、玉或は煉り物等あり鉢は金屬又は土燒きなり
- (12) 朝鮮政府より發せし官報 五日分
右は印刷にあらずして悉く筆寫したるものなり故に毎日の官報を發するが爲め二百名の寫字生を雇用すと云ふ、是れは加藤師の得て余に頒たれたるものあり
- (13) 朝鮮寫眞 五枚
(a) 朝鮮國王行啓の圖 (b) 迎恩門此門は支那街道にある有名の門なり (c) 釜山鎮及其近傍の民家 (d) 釜山港に於ける日本居留地 (e) 朝鮮家屋の景
- (14) 浦鹽斯德全圖 一續

右は四葉を以て一続きとなしたるものにして曾て英艦の寫真せしものを我か江水寫真師が寫真版となしたるものなりと云ふ當時は烏港を寫真するとは禁止せりと聞く

(15) 朝鮮初等教育教科文 一枚

右は加藤氏の得て頒たれたるものなり堅七寸横九寸の一枚紙に象形字より朝鮮音文算數のと迄列書したるものにして該國にては此の一枚の教科文を以て既に初等教育を卒りたる者なりと云ふ

(16) 魯西亞磚茶器 一個

モスコイ府製の陶器にして桃紅色に草花を書きたるものなり或る美術家の説に其畫柄の系統は日本的なりと云へり

(17) 石釜 二個

咸鏡道吉州製にして韓人は用て物を煮水を沸す余元港主事申氏に托して其一に「猛虎一聲山月高其一に「夜靜海濤三萬里」と書せしむ

(18) 石鍋 一個

右全

(19) 石函 一個

右全方面爲器城津産物と書せしむ

(20) オーツカ酒 一個

浦鹽斯德製火酒にして魯人の嗜みて飲用するもの

(21) 魯西亞製石鹼 數個

白色に藍の斑紋あるものなり將來或は輸入品ならんか

(22) 朝鮮木履 一足

木片を刳りたるものにして齒も亦造り附けなり價頗る貴し

(23) 魯西亞更紗 二反

地質厚く褪せざるを以て著名なり或は將來の輸入品ならんか

(24) 全菓子 一斤

一個々々に紙を以て包み菓中香料を藏め頗る佳味なり

(25) 全烟草 數函

稍々強きも其質佳良なりと云ふ

(26) 朝鮮人蔘 一個

古より廣東人參と稱して藥品となせしものなり其人體に似たるものは其價甚た貴く一個我二十五圓に値すと云ふ

(27) 朝鮮植物種子

數種

野菜、穀物等

(28) 魯製靴墨

數個

オデッサ港製にして其質佳良なり或は將來輸入品ならんか

(29) 朝鮮筆

大小三本

其製簡單なれども頗る用をなす

(30) 朝鮮風俗畫

五葉

衣服、家屋の製風俗習慣より家具、農器に至る迄百餘種を寫したる者なり

(31) 朝鮮の世界圖

今序に朝鮮人の世界に對する觀念に就き左に説明し併せて地圖に就き解説すべし

朝鮮人の世界に對する觀念

朝鮮人が世の事物に對して、頗る珍奇の考へを有するとは、毎度珍しからぬ

事にして、彼等が世界てふ觀念の如きも、其一ならんか則ち左に掲ぐる、奇態なる地圖(?)は、朝鮮人の考案に成れる世界地圖にして、何れの時代、誰某の手に成りしかは、今詳ならざれ共、兎に角、一千年以前の作なり、との説あるには、再び驚かざるを得ず、何となれば、甚だ不完全ながらにもせよ、稍々現今の地圖の位置と、粗々似たる所あるべければなり、恐らくは今の朝鮮人此の觀念あるやを疑ふなり、左ればにや、今を距ると二十餘年前今の大院君自ら指揮せられ、朝臣金應校なる人に命じて、補正せられたれども、舊牒を改めず、唯其小部分の修正に止りしとぞ

朝鮮世界圖の解

地圖の略説を示さんに、如何にも奇態なるには相違なきも、前にも嘗へる如く、千年以前、斯る地圖を製するに至りたりとせば、古代苟も地理學の稍發芽し、始めんとせりしは見るべきなり、則ち亞細亞、亞非利加、歐羅巴の如き、一部分の地形は、殆ど相類する所あれを也、圖中符合にて示す、(一)は朝鮮にして、黃海に突出し、(二)は支那にて其左右にあるは、黃河及揚子江ならん、(三)は安南を示し、其抱く海は、餘り灣入に過ぎざれ共、東京灣ならん、(四)は播胡として、印度を指

古より廣東人參と稱して藥品となせしものなり其人體に似たるものは其價甚た貴く一個我二十五圓に値すと云ふ

(27) 朝鮮植物種子

數種

野菜、穀物等

(28) 魯製靴墨

數個

オデッサ港製にして其質佳良なり或は將來輸入品ならんか

(29) 朝鮮筆

大小三本

其製簡單なれども頗る用をなす

(30) 朝鮮風俗書

五葉

衣服、家屋の製風俗習慣より家具、農器に至る迄百餘種を寫したる者なり

(31) 朝鮮の世界圖

今序に朝鮮人の世界に對する觀念に就き左に説明し併せて地圖に就き解説すべし

朝鮮人の世界に對する觀念

朝鮮人が世の事物に對して、頗る珍奇の考へを有するとは、毎度珍しからぬ

事にして、彼等が世界てふ觀念の如きも、其一ならんか則ち左に掲ぐる、奇態なる地圖(？)は、朝鮮人の考案に成れる世界地圖にして、何れの時代、誰某の手に成りしかば、今詳ならざれ共、兎に角、一千年以前の作なり、その説あるには、再び驚かざるを得ず、何となれば、甚だ不完全ながらにもせよ、稍々現今の地圖の位置と、粗々似たる所あるべければなり、恐らくは今の朝鮮人此の觀念あるやを疑ふなり、左ればにや、今を距ると二十餘年前、今の大院君自ら指揮せられ、朝臣金應校なる人に命じて、補正せられたれども、舊躰を改めず、唯其小部分の修正に止りしとぞ

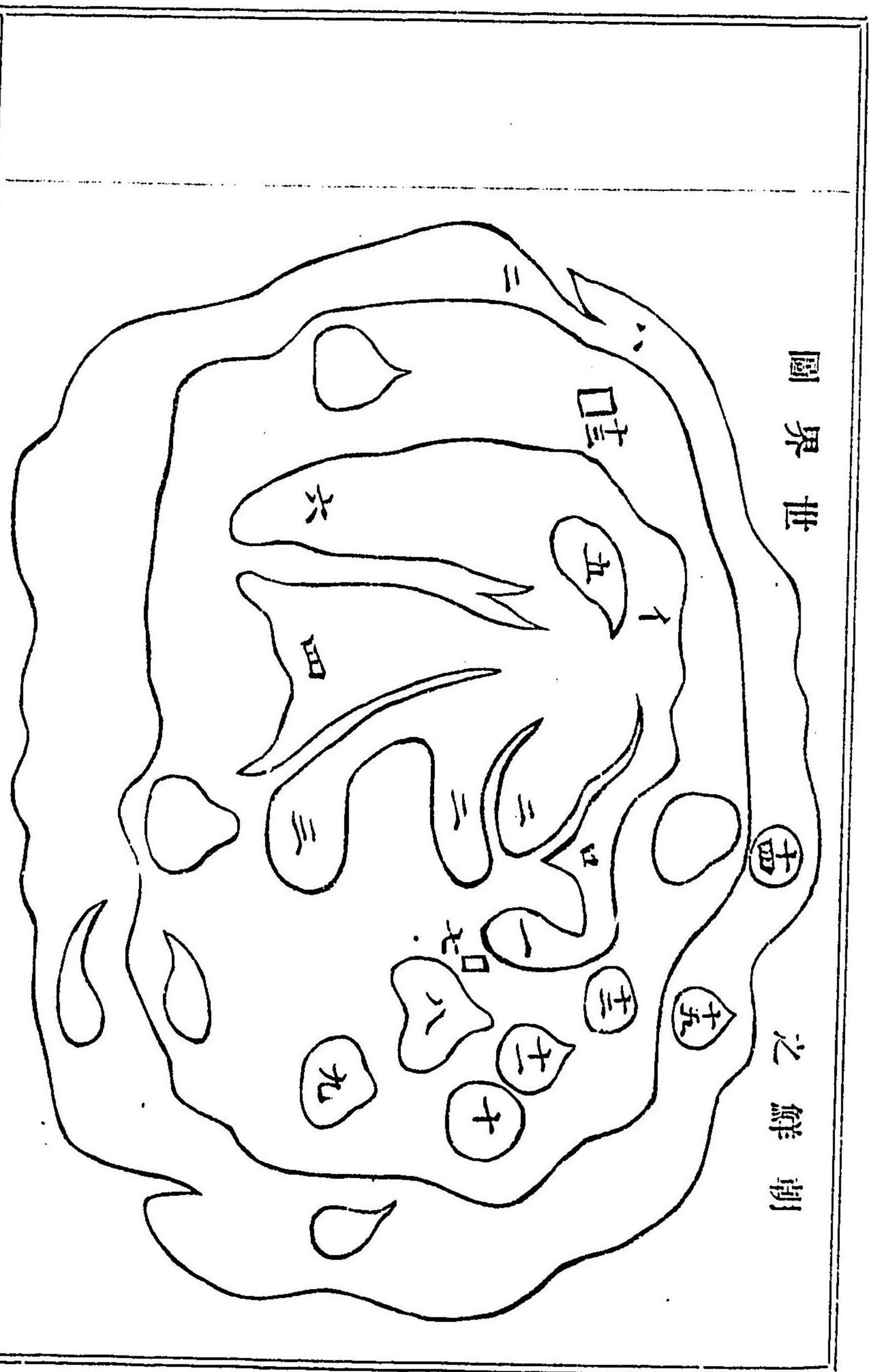
朝鮮世界圖の解

地圖の略説を示さんに、如何にも奇態なるには相違なきも、前にも言へる如く、千年以前、斯る地圖を製するに至りたりとせば、古代苟も地理學の稍發芽し、始めんとせりしは見るべきなり、則ち亞細亞、亞非利加、歐羅巴の如き、一部分の地形は、殆ど相類する所あれを也、圖中符合にて示す、(一)は朝鮮にして、黃海に突出し、(二)は支那にて其左右にあるは、黃河、及揚子江ならん、(三)は安南を示し、其抱く海は、餘り灣入に過ぎざれ共、東、京、灣ならん、(四)は蕃胡として、印度を指

し、(五)は歐亞の境ある裏海なり、又(イ)より(ロ)にかけては、則ち西伯利なり、(四)と(六)との間に灣入するは紅海にして、(六)は即ち西域とて、今の亞非利加なり、(七)は日本とあれ共、恐らくは對州のみを以て、日本と信ぜしものならん、(八)は九州、(九)は原名廣桑とありて、今何れに當るや詳ならず、或は琉球ならんとの説あり、併し朝鮮にては、古來琉球を琉球國と稱し居れば、或は又琉球にもあざざる可しとの説もあり、(十)は四國、(十一)は本州、(十二)は北海道ならんか、然れども原圖之を示さざれば、詳ならず、又(十三)は白民とありて、今の英國にして、人種の面貌によりて斯く名けしものならんか、地圖の周圍を繞れる陸地は、南及北亞米利加に當れるが、此圖一千年前の作と云へば、未だコロンブス氏か米州發見前なるが、斯る大陸の存するを、既に知りしものなるか、元、此圖を作る頃は、勿論世界を平扁のものと思像せしを以て、南北に細長き、亞米利加は之を圓くして、周圍を繞したるものならんとの説あり、(ハ)と(ニ)との間あるは、巴拿馬地類なるか、(十四)(十五)の如き圓形なるは、沼澤の地にして、北米の北部は、今も大湖地方とて、湖沼多きは人の知る所にして、既に此等の事も知れ居りしか、此原圖には、國を列すると九十五の多きあれ共、今之を略き、其最も奇

世界圖

朝鮮之圖



なるものは

無暇	三首	無暢	大幽	深目	不死
淑女	盤木	一目	食米	火山	廣野
羽民	大人	中容	甘淵	三身	毛民
君子					

等の如き國名あり、各々其容貌、性質、風土等によりて、名けしものならん

朝鮮西伯利紀行大尾

明治二十七年一月十日印刷
明治二十七年一月十三日發行

著 者 矢 津 昌 永

熊本縣熊本市東外坪
井町百三十六番地

發 行 者 小 柳 津 要 人

東京市日本橋區通三
丁目十四番地寄留

印 刷 者 齋 藤 章 達

東京市日本橋區兜町
二番地

發 行 所 丸 善 株 式 會 社 書 店

東京市日本橋區通三
丁目十四番地

印 刷 所 東 京 製 紙 分 社

東京市日本橋區兜町二番地



肆書捌賣

東京神田表神保町
 同 新橋竹川町
 同 銀座四丁目
 京都河原町通二條下
 大坂北久寶寺町四丁目
 同 備後町四丁目
 同 北久太郎町四丁目
 同 心齋橋筋一丁目
 名古屋京町一丁目
 同 本町三丁目
 金澤片町
 熊本新二丁目

中 西 屋 邦 太
 共 益 商 社
 博 聞 社
 大 黑 屋 書 店
 東京丸善株式會社書籍店出張所
 梅 原 龜 七
 柳 原 喜 兵 衛
 松 村 九 兵 衛
 野 崎 覺 次 郎
 川 瀨 代 助
 益 智 館
 長 崎 次 郎

肆書捌賣

新瀨古町通六番町
 津大門町
 飯田池田町
 静岡江川町
 濱松紺屋町
 仙臺國分町
 山形七日町
 函館末廣町
 神戸相生橋
 松山湊町
 青森米町
 横濱辨天通

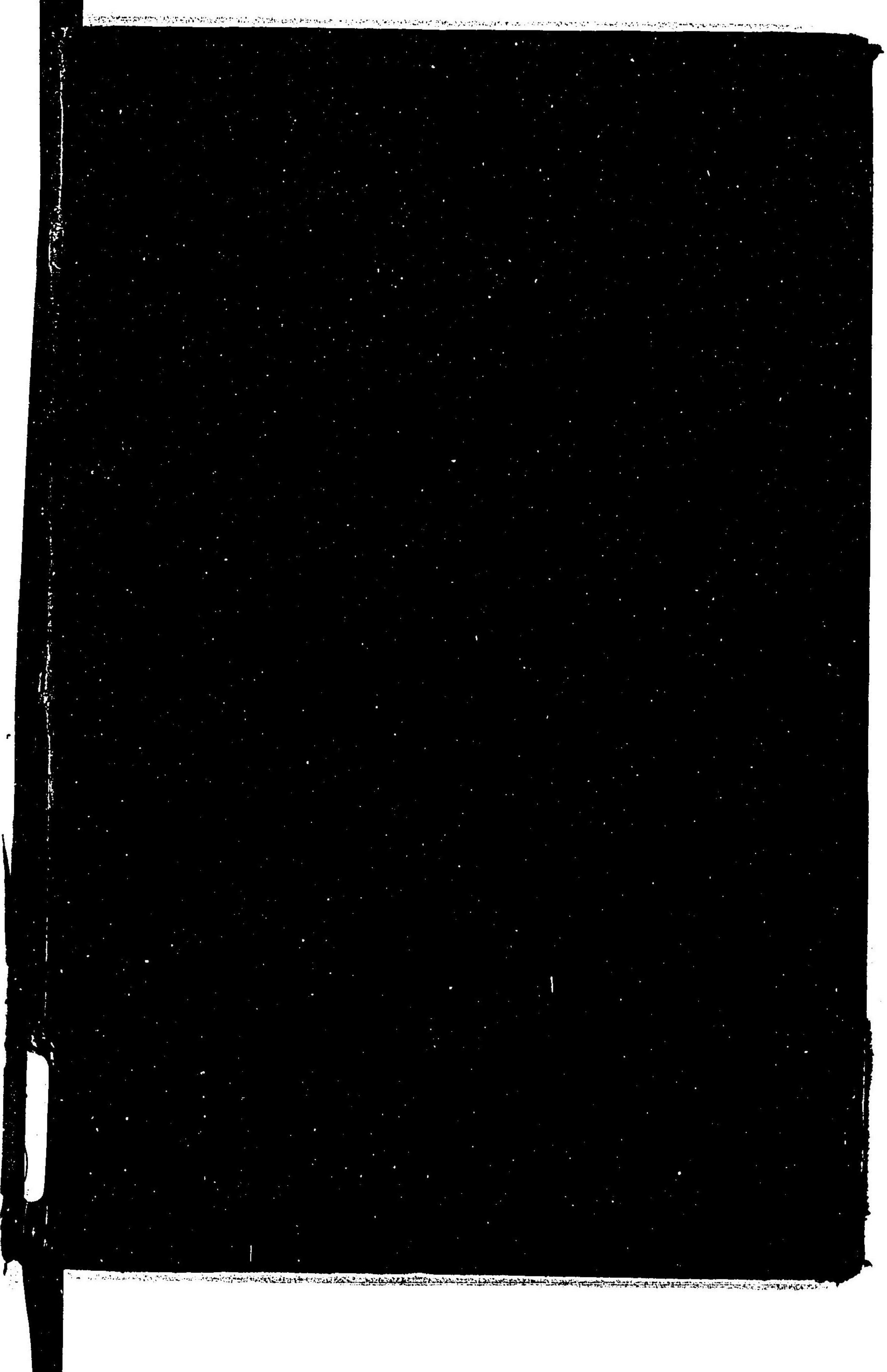
櫻 井 產 作
 河 島 九 右 衛 門
 奧 村 收 藏
 廣 瀨 市 藏
 谷 島 屋 源 三 郎
 高 藤 書 店
 五 十 嵐 太 右 衛 門
 魁 文 社
 熊 谷 久 榮 堂
 土 肥 與 兵 衛
 成 田 泰
 丸 屋 書 店

肆書捌賣

長崎引地町
同 酒屋町
佐賀白山町
柳川瀬高町
久留米米屋町
鹿兒島六日町通り中町
高知種崎町
同 塚町
廣島横町
岡山上之町
松江天神町
富山東四十物町

鶴野書店
安中半三郎
河内壯介
宮本宗四郎
菊竹儀平
吉田幸兵衛
澤本駒吉
山中專助
松村善助
細網謹
川田清
中田書店

77
077



44
140

026441-000-2

44-140

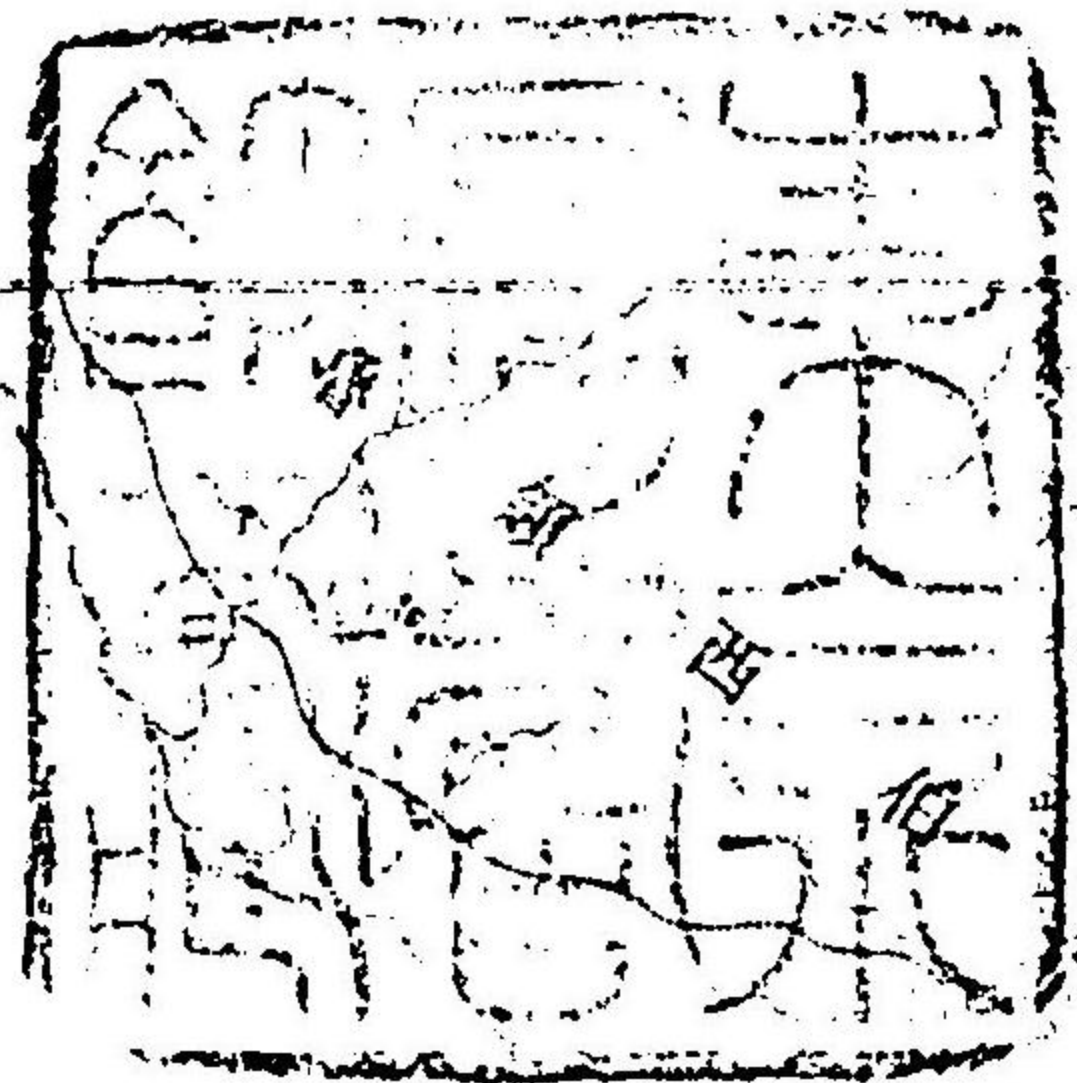
朝鮮西伯利紀行

矢津 昌永/著

M27

ADD-0095





支那

滿州

朝

利